
魔法少女リリカルなのはStS ~ 闇の叡智と光の右手 ~

月兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS 闇の叡智と光の右手

【Nコード】

N7571L

【作者名】

月兎

【あらすじ】

JS事件から4ヶ月

雪の舞い散る海鳴市でなのはとフェイトが出会った漆黒に身を包んだ一人の青年

それは血塗られた神剣を巡る機動六課と管理局、そしてある兄妹の

物語の始まり

題名を一部変更しました

Prologue (前書き)

はじめまして月兎と申します。

この作品はリリカルなのはStrikersを下敷きにJS事件後の世界を描いた二次創作作品です。

拙い文章ですが、よろしく願います。

Prologue

ミッドチルダ北部「聖王教会」

機動六課部隊長八神はやては六課後見人の一人、教会騎士カリムⅡ
グラシア少将の元を訪れていた。

「…以上がJS事件の詳細です、騎士カリム」

「ご苦労さま、はやて。報告なんて形式だけでいいのに、本当にお
疲れさまね」

JS事件から4ヶ月が経ち、ミッドチルダにもようやく平穏が戻り
始めていた。忙しかった先の事故の処理もようやく終わり、はや
てはその報告に来ていた。

「そうはいかんよ。今回の事件は教会の協力あってこそ解決できた
んや。報告が遅くなってごめん、カリム。六課も色々忙してな」

真面目な性格のはやてのことだから手抜きの記事などするはずがな
い。そして、管理局の現状と部隊長としての役目。限られた時間の
中でこの手にある報告書を作るために目の前の少女がどれほど腐心
した。それを承知しているカリムはそれ以上は何も言わなかった。

「そういえば、六課の隊舎はもう元に戻ったのよね」

「おかげさまで。先月から本格的に動き出しています。隊舎も新しいな
ったことやし、部隊長としてもっともっと頑張らなな」

元気いっぱいなの、しかし刹那的なその笑みがカリムには苦しかった。きつと、部隊でも彼女はこんな風に笑っているのだ。明るく元気に、みんなの為に、そして自分自身の為に。

「あまり無理してはダメよ、はやて」

たぶん、彼女はまだ無理を続ける。はやてがそういう性格であることをカリムはよく知っている。そして、絶対にそれを周りに見せないことも、独りで抱え込んでしまうことも。

「無理なんてしてへん。みんな頑張ってるんや、隊長のわたしはこれぐらい当然や」

そう言うてはやてはまた笑う。決して悪い性格ではない。しかし、善い性格かと聞かれると素直に肯定できなかつた。

「……まったく、不器用なんだから」

「カリム？なんか言った？」

「なんでもないわ。はやて、困ったことがあつたらいつでも言ってくきなさい。私が助けるから、友達として」

助けることしか出来ない自分が時々嫌になる。それでも、私にはこうすることしか出来ない。

「おおきに、カリム……でも、ほんまに便利やな、カリムの稀少技能レアスキル。今回の事件もこれがなかったらどうなつてことか」

カリムの稀少技能『プロフェーティン・シュリフテン』

古代ベルカ語で書かれた詩文形式の半年から数年先の未来を予言する能力。様々な解釈が可能で、その的中率はカリム曰く「よく当たる占い程度」だが、この予言のおかげで先のJS事件にも備えることが出来たのだ。

「はずれることもあるのよ？たとえば、これ」

そう言つてカリムは予言の書かれた紙の束から一枚抜き出してはやてに渡した。

「えーと『光は影を生み出した 影が世界を覆うとき 滅びの剣が光を引き裂く 禁じられた闇の叡智 神魔の怒りは焰となり天地を焼き尽くす 失われた命を以て人は識り過ぎた対価を識る』か…不吉な予言やな」

「はやてと初めて出会った頃の予言よ。闇の叡智』がアルハザードに関連したものだと思つて管理局には警戒するように言つただけど…」

そう言つてカリムは苦笑を浮かべた。当時の地上本部のトップは今では亡きレジアス中将だった。カリムはやてのような稀少技能保持者を嫌い、カリムの予言に対しても聞く耳を持つとしなかつた。しかし、そんなレジアス中将のことをカリムはそれほど嫌いではなかつた。多少強引ではあつたが、彼には彼なりの正義があり、信念があつた。結果だけを見るなら歴代のトップより優秀であることは明らかで、JS事件で数々の悪行が公になり、殺されてしまった今でも彼を支持する者は少なくない。

「まあ、何事もなくて済んでよかつたんやないの？」

カリムの苦笑の理由を察したはやてがそう尋ねるとカリムは頷いた。大切なことは予言が当たるか、外れるかではない。近いうちに起きるであろう事件や災害を未然に防げるか、被害をどれだけ少なくできるか、が大切なのであり、外れたことに越したことはないのだ。

「ああ、そうそう…能力限定解除権限の補填申請が通ったわよ」

「えっ！？カリム、ほんまに？よかった、正直、無理やと思ってたんや…地上本部の査定が厳しいのは有名やから」

能力限定とは対象の能力を制限する技術で、いわゆるリミッターの様なものである。人間に用いれば能力低下によって魔導師ランクが下がり、一部隊に優れた魔導師を幾人も所属させる裏技ともなる。解除できる人間や回数など制限は決して少なくないが、はやてを筆頭にS級越えの魔導師、騎士が多数所属する機動六課が無事に設立出来たのもこの技術あってこそである。

「今の地上本部は…ね？」

最後まで言わず、言葉を濁したカリムの笑みはとても清々しいもので、さすがのはやても突っ込むことができなかつた。きつと触れてしまえば、後悔することになる。それだけは確信できた。

それから二人は話は他愛のない雑談へと移った。仕事の話を抜きにした女同士のおしゃべりに興じるはやては本当に楽しそうだった。女性が多い六課とはいえ、はやてがこんな風に話すことは滅多にないのだ。話が終わった頃には夕方になろうとしていた。教会を出たはやては夕日で赤紫色に染まった空を見上げて呟いた。

「…このままずっと平和が続いた嬉しいんやけど」

まるで祈るような、小さな声が空に消えていく。ずっと平和に、そ

れはきつと誰もが願う当たり前り前のこと。それなのに、その祈りは届かない。

災いの足音はすぐそこまで迫っていた。

第一話『星々の邂逅』（前書き）

どうも、月兔です。

色々あって手直しを加えました。

ストーリーの大幅な変更はないんですがオリキャラ設定が曖昧だったのでけっこう修正しちゃいました。それと、一話一話が長くなり過ぎて、執筆に時間がかかりすぎていたので今回は一話一話を短めにし、執筆スピードもとい、連載スピードを上げられるように頑張ってみました。

というわけで、ちょっとだけ新しくなった『魔法少女リリカルなのは strikers 闇の叡智と光の右手』をお楽しみください。

出逢いは偶然

そして、出逢いは始まり

宿命を背負った星々が

集い、重なり、交わって

新しい物語の幕が上がる

魔法少女リリカルなのはStrikers 闇の叡智と光の右手、
始まります。

第一話『星々の邂逅』

雪の舞い降りる寒空の下、夜空を見上げる一つの影。

「冬は好きだ。星が綺麗に見えるから」

「私は嫌い。だって寒いもの」

そう言つて少女は冷たくなつた左手に息を吹きかける。

「見てごらん。僕達が欺瞞や争い、裏切りで誇りや正義を汚して、地上を醜くしてしまつたとしても、星々の光までは汚すことができないんだ」

子供のように無邪気に瞳を輝かせ、青年は星を見つめている。

「でも、その星の光さえ届かない闇の深淵を私は識っている。深い深い世界の闇、そこが私の住処だつた」

少女が俯きながら呟く。

「僕の星は此処に、僕の隣に」

「あなたのその台詞は何度も聞いた」

抱き寄せようとした青年の腕から少女はすりと逃げて、拗ねたように笑う。

「そういつてあなたは空しか見ていないじゃない。私はいつも二の

次

「そ、そんなことない」

青年が慌てて否定する。しかし、少女は不敵に笑った。

「南の空で流星群が見えるって知ったら私を置いて行ってしまおうでしょう?」

「うっ…それは…」

少女の言葉に青年は言葉を詰まらせる。悲しいかな、青年に少女の言葉を否定することができない。数瞬、過去の言動を振り返った青年はばつの悪い顔した。

「嘘でもいいから否定しなさいよ」

「ごめん…」

呆れたような、怒ったような少女の声に青年は情けない声で謝るしかなかった。そんな青年を見て少女は悪戯っぽく笑った。

「でも、私はそんなあなたが好き。それに感謝している。星も見えない闇の底から私をここまで導いてくれたこと。本当にありがとう」

少女の言葉に青年は何も答えず、ゆっくりと空を見上げる。舞い踊る雪の合間に一際煌々と青白く輝く星を見つけると微笑んで、少女にも判るように指差した。

「見てごらん、変革の星だ。あの星が姿を見せる時、世界は変わる

んだ」

「…お願い、私を導いて。どこまでもついていくから」

そう言って二人はどちらからと言つでもなく、星明かりの下でそつと唇を重ねた。

第一話『星々の邂逅』

一月末 海鳴市 喫茶『翠屋』

「ヴィヴィオ、おいしい？」

「うんっ」

口一杯に苺のショートケーキを頬張りながらヴィヴィオが頷く。それを見て嬉しそうに二人の母親が微笑む。

機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉とライトニング分隊長フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官の二人である。本来、ミッドチルダで仕事で忙殺されているはずの二人が何故地球に来ているのかというと、先日正式になのはの養子となったヴィヴィオをなののはの両親に会わせる為に忙しい仕事の合間に休暇を取ったのだ。初めはなのはとヴィヴィオの二人だけの予定だったが、話を聞いたはやてがフェイトにも休暇を与え、三人揃って挨拶に行く運びとなったのだ。

「それにしてもびっくりしたぞ、なのは？久しぶりに帰ってきたと

思ったらなのはが孫を連れてたなんてな」

「にやははは、ごめん、ごめん。隠してるつもりはなかったんだけど、色々忙しくて後回しにしちゃってて…」

「手続き自体は去年の内に終わらせていたんだけど、なのはも仕事
が忙しくて」

士郎の言葉に二人が言い訳がましく言っていると桃子は気にしないで、首
を横に振った。

「便りがないのは元気の証っていうけど、親としては何も便りがな
いのは寂しいものなのよ」

「うう…ごめんなさい」

桃子の言葉になのはは何も言い返せなかった。二人とも怒っている
わけではない。それが判るからこそ申し訳なく思ってしまう。そし
て、同時に嬉しくもあった。二人がなのはを心配するのは愛情の裏
返しなのだと実感できることが。六課とは異なる居心地のよさがこ
こにはあった。

「どうしたの、なのは？そんなに嬉しそうにして」

「ヴィヴィオを連れてきて、ううん、家に帰ってきてよかったと思
って…ヴィヴィオ、おじいちゃんとおばあちゃんだよ。ご挨拶は？」

「おじいちゃん？おばあちゃん？」

初めて聞いた言葉にヴィヴィオを首を傾げる。

「ヴィヴィオのママのお父さんとお母さんのことよ」

桃子が自分自身を指差しながら説明する。ヴィヴィオは土郎と桃子を交互に見比べ、指差しながら呟いた。

「ママのお父さんと…お母さん？ヴィヴィオのおじいちゃんとおばあちゃん？」

孫がいるとは思えない若々しい外見を保っている二人になのはとフエイトは笑いを堪えている。

「ええ、そうよ。よくできました」

桃子がヴィヴィオの頭を撫でて誉める。ヴィヴィオは照れたように顔を赤らめ、嬉しそうに笑う。

「高町ヴィヴィオです。よろしくおねがいします、おじいちゃん、おばあちゃん」

「桃子です。よろしくね、ヴィヴィオちゃん」

「土郎だ。よろしくな、ヴィヴィオ。しかし、あれだな…改めて呼ばれるとなんだかな…」

嬉しそうに笑う桃子と照れを隠すように笑う土郎。それを見ていたフエイトは念話でなのはに話し掛ける。

(なんていうか…いいね、こういうの。ちょっと羨ましいかな)

(そうだね…みんな、本当に楽しそう)

なのはは紅茶を、フェイトはコーヒーをすすり、お互いに笑いあった。他愛のないおしゃべりに美味しいケーキと紅茶、コーヒー。探せばきつとどこにでもあり家族の団欒。それは二人にとってずっと望んでいた幸せの形だった。

しかし、その幸せのかき消すように二人のデバイスがアラートを告げた。

《マスター、南西1500mに複数の魔力反応を確認しました》

(フェイトちゃん…)

(うん、急がないと)

二人は顔を見合わせると頷き合った。二人の雰囲気が変わったことを感じとった士郎が小さな声で尋ねた。

「なのは、何かあったのか？」

「ごめん。急に仕事が入っちゃった」

なのはの言葉に士郎と桃子は残念そうな顔をした。

「せっかく久しぶりに会えたのに…」

「無理はするなよ」

「うん…」

なのはは申し訳なさそうに頷いた。

「ヴィヴィオ、フェイトママ達ちよつと急なお仕事が出来ちゃったんだ。ここで少しお留守番してくれるかな？」

それまで嬉しそうにケーキを頬張っていたヴィヴィオはフェイトの言葉を聞いて泣き出しそうな顔になる。

「すぐにかえってくる？」

「もちろん。ヴィヴィオがいい子にしてたらね」

不安そうなヴィヴィオの瞳がフェイトを引き留めようとする。それを振り払ってフェイトは優しく微笑む。

「約束する。すぐに帰ってくるから、ね？はい、指切り」

フェイトが膝を屈めてヴィヴィオと視線を合わせる。小指を突き出すとヴィヴィオも泣きそうな顔のまま指を絡ませる。

「「ゆびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんのーます」「

「お父さん、お母さん、ヴィヴィオのこと少しお願い。すぐに戻るかから」

なのはがそう言うと二人は店の外に出た。翠屋を出た二人はそれぞれ、待機モードのデバイスを取り出す。

「レイジングハート…」

「バルディツシュ…」

「セーットアップ!!」「」

桃色と金色の光が二人を包み込む。デバイスとバリアジャケットを展開した二人はそのまま空へと飛び立つ。

「急ごう、フェイトちゃん」

「うんっ!」

「魔力反応、このあたりのはずだよな?」

「うん…」

現場に到着した二人が上空から地上を見下ろす。一面に真っ白な世界が広がっている。二人の吐く息も白く、気温の低さを物語っている。雪の降り積もった住宅街に人影は見当たらず、どこか閑散とした印象さえ受ける。

「なのは、二手に別れて捜索」

「そうだね、フェイトちゃん」

そう言つて二人が別れようとした瞬間、“それ”は起きた。二人のいる場所から数十メートルも離れていない空間に突然、大きな爆発音とともに真紅に燃え上がる巨大な火柱が立ち上がった。炎に照らされ、住宅街が真紅に染まる。炎はいとも容易く天を貫き、煌々とした輝きを放つ。ほとばしる灼熱がその魔力が尋常でないことを告げていた。

《マスター、巨大な魔力反応確認。推定SS+級》

「「えっ!?!」」

レイジングハートの告げた魔力値に二人が驚きの声をあげる。しかし、二人にそれ以上驚く間を与えることなく事態は進む。突然、火柱の中から漆黒の衣に身を包んだ女性が飛び出した。舞い散る雪の中を柵引く黒髪がひどく艶めかしく、右肩の紅い染みが痛々しい。その女性の腕には和服姿の少女が抱かれている。意識を失っているらしく、抱かれたまま動く気配はない。服が多少焦げ付いているものの大きな怪我をしているようには見えない。

「この炎…あの人が?」

「わからない。でも、あの二人ならきつと何か知ってるはず。行く、なのは」

「待って、フェイトちゃん。あれを見て」

二人の方へ飛んでいこうとするフェイトをなのはが引き止める。なのはの指差した先に翼の生えた白い化け物がいた。雪のような純白ではなく、灰色に近いどこか濁った白。人よりも細く、長い腕はひどく不格好だったが、その腕から伸びる爪の鋭さは遠くから見てもよく判る。化け物が鋭い爪を振りかざして二人の背後から襲いかかろうとした。死角を取られた女性はそれに気付いていない。たとえ気付いていたとしても両手を塞がれた状態ではどうすることも出来ない。

「なのはっ!!」

「うん、レイジングハートっ!! アクセルシューター、シュートっ!!」

《Acceler Shooter》

十数個の光弾が瞬時に生成され、白い化け物に向かって放たれる。化け物の爪が二人に届くよりも早く、光弾が化け物の体を穿つ。全弾が命中し終えた時には既に化け物の体中に惨たらしい穴が幾つも開き、元の形を失っていた。なのはの攻撃をに気付いた黒い服の女性に驚きの眼差しで二人を見つめる。

「お前達…一体何者だ？」

星々の邂逅 Fin .

第一話『星々の邂逅』（後書き）

守りたい人がいる

戦わないと守れないというのなら

大切な人を傷つけるといふのなら

もう、私は迷わない

次回、魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 闇の叡智と光の
右手

第二話『始まりの風』

第二話『始まりの風』（前書き）

一話一話を短くしたら、手直しも案外簡単になりました。思わぬ収穫です。

しばらくはどこかで読んだことのある内容だったりしますが、ちょっとずつ違っているんで、ご容赦のほどよろしくお願いします

まだまだ駆け出しの作品ですが意見や感想を聞かせて頂けると嬉しいです。

では、どうぞ

幼い日の固い約束を

22

あなたはもう忘れていてしょうけど

今更と思うかもしれないけど

それでも守ろうと、ともに思った

魔法少女リリカルなのはstrickers 闇の叡智と光の右手、
始まります

第二話『始まりの風』

第二話『始まりの風』

第97管理外世界『地球』 海鳴市 刀隠神社

「何度も申し上げましたようにあなた方に『神剣』をお渡しするつもりはございません。どうぞ、お引き取りください」

凜としたサヤの声が本殿に響く。声は若く、瑞々しさに溢れているが老成した威厳が滲み出ている。若い女性が着るには不釣り合いな重苦しい鈍色の着物を身に纏った少女は高校生程度にしか見えない。盲目なのか瞳は固く閉じられ、すぐ横に細長い白い杖が置かれている。少女の隣には二十歳程の青年が控えている。切れ長の眼差しに背中まで伸ばした黒髪は一見すると女性のような印象さえ与えてしまふ。

「ご覧の通り、サヤは目が不自由だ。見知らぬ方と会い、話をするだけで普通の方の何倍もお疲れになる。薄墨殿、今日はもうお引き取り願いたい」

丁寧な、しかし、有無を言わせない強い口調だった。

「此方としては十分な金額を用意したつもりですが、御納得頂けませんか？ご両親が亡くなられて色々大変でしょう。決して悪い話ではないと思うのですが」

対する薄墨と呼ばれた男は三十歳を越えたかどうかといった年の頃

で、グレーのスーツを見事に着こなしていた。丁寧な言葉遣いとは裏腹に、不敵な笑みを浮かべたその表情は明らかに少女を見下していた。盲目であるということ、若いということ、女であるということ。サヤと呼ばれた少女の全てを見下していた。慇懃無礼という言葉を体現したような男に向かって少女は声を冷たくして言った。囁くような細かい声音が不思議なくらい強く響く。

「お金の問題ではありません。神剣はこの神社の御神体、であることはあなたもご存知でしょう？それに、私は目が見えぬ故に人には見えぬものが見えることもあるのですよ」

「ほう、それは興味深い。一体何をご覧になったのです？」

薄墨の小馬鹿にした口調に青年が立ち上がるうしたが、サヤがそれを止める。

「私を蔑み、見下す心。お金を払うつもりはなくて、隙あらば力づくで神剣を奪うでしょう。違いますか？」

薄墨は僅かに眉をひそめて、口元に微かな笑みを浮かべた。今までと異なり、不思議と不快感のない笑みだった。

「なるほど。私は貴女を少々侮っていたようだ」

「では、お引き取りを」

そう言った青年に薄墨は首を横に振って応えた。

「一つ、聞きたい。私が力づくで神剣を奪うかもしれないと知って、

何故逃げようとしはない？その男に守れるとでも思っていたのかね？」

「ええ。ハヤテなら必ず」

サヤは口元に笑みを浮かべた。それはハヤテへの信頼に溢れた笑みだった。閉じられた瞳の奥にはきつと自信に満ち、輝いていることだろう。そんなことを考えながら薄墨は不敵に微笑んだ。狂気を孕んだ不気味な笑顔だった。

壊したい。その信頼を、自信を。

完膚無きまでに壊したい。

意味などない。

強いて挙げるなら、気持ちいいから。

くだらない理由だと薄墨自身思う。しかし、もう後に引くつもりはない。薄墨の異変に気付いた青年が静かに立ち上がり、薄墨の前に立ち塞がる。背中まで伸びた黒髪が艶つぽく揺れる。柳のよう細く、無駄のない体つき、隙のない構え、鋭い眼差し。しなやかな脚から繰り出されるであろう蹴りを想像して、薄墨は苦笑した。

「なるほど。一筋縄ではいかない相手のようだ」

薄墨は懐から札を取り出すと指の間に挟み、ハヤテと対峙した。

「勘違いしないでください、サヤ。貴女が素直に神剣を渡してくれさえすればこんなことにはならなかった」

「黙れ、下郎」

ハヤテの冷たい声が響く。薄墨は軽く肩をすくめてハヤテを睨みつけた。

「口の聞き方に気をつける、小僧。巫女守風情が誰に向かって口を聞いている」

薄墨がそう言った瞬間、ハヤテの体が一瞬霞んだかと思うとその場から消えた。そして、瞬きする間もないほど素早く、蹴りの間合いに踏み込み、薄墨の頭を狙って上段蹴りを放つ。しかし、その蹴りを薄墨の左腕が受け止めた。

「ほお、符術士風情がいい反応だ」

感心したように呟いたハヤテはすぐに脚を引っ込め、薄墨との間合いをとった。

「来よ、玄鬼っ！！」

薄墨の持っていた札が鈍い光を放ち、人型の異形へと姿を変えた。どす黒い半透明に不気味な模様が刺青のように浮き上がっている。生気のない瞳は生ける屍と呼ぶに相応しいほどおぞましい。声にもならない呻き声を上げて異形達がハヤテとサヤに襲いかかってきた。

「貴様、式鬼遣いか…」

「いかにも」

薄墨が不敵に笑う。それに対抗するかの如く、ハヤテが叫ぶ。

「貴様が何者であろうとサヤには指一本触れさせん。『風神』っ！
！」

ハヤテの声に応えるように、左手薬指にはめられた指輪が淡い緑の光を放つ。糸状に広がっていたそれは、織り合うように重なりあい、光の帯となってハヤテの左腕に絡まっていき、手甲へと姿を変えた。真珠のような光沢と柔らかな色合い、硝子細工のような細さを兼ね備えたそれはこの場に不釣り合いなほど優雅に見えた。

「エレメントデバイス…確か風の試作品だったか…情報収集の為に貸し与えていたのを忘れていた」

ハヤテの手甲を見て薄墨は思い出したように呟いた。

「恩を売るつもりなら止めておけ」

「そんなつもりは毛頭ない。まあ、神剣のついでに試作品も回収するとしよう。博士がサンプルを欲しがっていたはずだ」

睨みつけてくるハヤテの視線を軽く受け流し、薄墨は式鬼に命令する。
る。

「殺せ」

薄墨の命を受けた玄鬼は鋭い爪を振りかざしてハヤテに襲い掛かる。しかし、ハヤテは玄鬼の攻撃よりも速い蹴りを放ち、迎撃する。玄鬼の両手を蹴り落とすと防御の手薄となった体に勢いよく左腕を振り下ろした。次の瞬間、風の刃が玄鬼を切り裂き、その体が真っ二つに裂けた。

「ふん、他愛ない」

一瞬で玄鬼を倒したハヤテはそのまま身を返して薄墨を睨みつけた。しかし、薄墨は動揺することなく、不敵に笑う。

「ハヤテ、式鬼の気配はまだ消えていませんっ!!」

悲鳴にも似たサヤの声にハヤテが振り返る。そこには切り裂かれたはずの玄鬼が爪を振りかざして立っていた。間一髪、体をひねらせ玄鬼の爪から逃れたたハヤテだが、頬に一筋の紅い線が走る。

「式鬼と戦うのは初めてのようだね、ハヤテ」

「なるほど。百聞は一見に如かず、とはこのことだな」

頬を流れる血を拭いながらハヤテが笑う。

「式鬼はその身の基となる核を破壊しない限り何度でも再生すると聞いていたが…こつも速いとは」

口こそ笑っていたが、ハヤテは内心焦っていた。式鬼の再生能力はもちろんのこと、薄墨の実力を見誤っていた。一対一なら負ける気しないが、サヤを守りながら式鬼と戦うのは簡単なことではない。

（ハヤテ、大丈夫ですか？）

（傷の方は問題ありませんが、少々厄介な相手です）

サヤの言葉がハヤテの頭に響く。ハヤテは包み隠さず事実だけを告げる。サヤに嘘が通じないことはハヤテもよく知っている。目が見えない代わりにサヤには人の心の奥底を見抜く力がある。もちろん、実際に目で見ていたのではなく、言葉の間の微妙な揺れや声、口調諸々を聞き取ることで見抜いているのだが。

(…ハヤテ、私が相手をします)

(待てっ！！サヤに戦わせるわけには…)

(心配なさらなくてください。私も無茶はいたしませんから)

サヤはハヤテにそう告げると物見えぬ瞳をゆっくりと開いた。

つぶらな双眸は鈍い輝きを放つ。光を映さない、漆黒の瞳は玄鬼を漆黒に見つめる。まるで研ぎ澄まされた日本刀のように鋭い気迫。それが盲目の少女から放たれているということを薄墨は信じたくなかった。

「貴様…何者だ？」

サヤから発せられる尋常ではない威圧感。飢えた虎の前に突き出されたとしてもここまで震えはしないだろう。薄墨は自嘲気味に笑いながらサヤに尋ねた。

「私はサヤ。剣の巫女。ただ、それだけ」

名乗りを上げるサヤの顔に笑みはない。まるで氷のよう冷たく、鋭い目で薄墨を見つめる。盲目のサヤに薄墨が見えるはずがない。頭ではわかっているはずなのに薄墨の震えは消えない。まるで全てを

見透かされているようで、咎められているようで。

「神剣の力はあなた方の仰る通り、とても強く、危険なものです。人の世にあつてはいけない忌むべき力だと私も思います。でも、だからこそあなた方に差し上げることができません。お引き取りください」

薄墨は我が耳を疑った。薄墨は震え上がってしまうような力を突きつけて、薄墨に退くことを願うサヤの言葉が信じられなかった。

「一つ、聞かせてもらいたい。剣の巫女よ、何故私を殺そうとしない？」

震える声を懸命に抑え、薄墨がサヤに尋ねた。

「争いごとは嫌い。あなたの命を摘んでしまうことは私の力を以てすれば容易いけれど、それに何の意味があるというの？」

薄墨の震えを感じとったサヤは十分だと判断しと目を閉じた。それと同時にサヤから威圧感が消える。まるで 何事もなかったかのよう。サヤは優雅に一礼して薄墨に背を向けた。そのサヤの背に向かって薄墨が何事か呟く。その言葉にサヤが振り向くと薄墨はもう一度同じ言葉を呟いた。今度は殺意と敵意を込めてはつきりと。

「…甘いな」

振り向いたサヤに目掛けて玄鬼の爪が容赦なく振り下ろされた。

始まりの風
F i n
・

第二話『始まりの風』（後書き）

卑怯者と罵られてもいい

臆病者と嘲笑われてもいい

それでも、守りたい人がいる

その為なら、私は…

次回、魔法少女リリカルなのはStrikers 闇の叡智と光の
右手

第三話『目覚めの刻』

第三話『目覚めの刻』（前書き）

どうも、月兔です。

三話目です。

ちょっとした余談ですが、この三話に出てくる『束 ツカ』という長さの単位。昔の日本で使われていた単位で、どれくらいの長さかと言うと一束が拳一つ分の長さで約10センチです。

オリキャラしか登場しないお話ですが、どうぞお楽しみください。
ご意見、ご感想、お待ちしてます

私の為に生きてくれる人がいる

私の為に戦って、傷付いて、苦しんで

それが嬉しく、でも悲しくて、悔しくて

もう守られるだけのお姫様は嫌

そう、決めました

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手、
始まります

第三話『目覚めの刻』

第三話『目覚めの刻』

「っ…」

痛みを堪える呻き声。そして、鉄錆のような血の臭い。光を失った代わりに常人のそれよりはるかに研ぎ澄まされた感覚が惨状を無慈悲に告げる。

「ハヤ、テ…」

盲目のサヤには何も見えない。しかし、目の前で何が起きているのかは容易に想像がついた。薄墨の不意打ちからサヤを護る為ハヤテがサヤの前に立ち塞がり、傷を負ったに違いない。傷の程度がどの程度かサヤには見当もつかなかったが決して軽いものであるはずがない。

「サヤ…無事、か…よかった」

痛みを堪えている苦しげなハヤテの声。玄鬼の爪が右肩を貫いているのだから当然のことだった。

「よくありませんっ!!」

悲鳴のようなサヤの叫び。常人なら悲鳴を上げるほどの怪我を負いながらハヤテは声一つ漏らすことなく、薄墨を睨みつけた。

「貴様…何のつもりだっ!!」

湧き上がる痛みを怒りで押さえ込み、ハヤテが吼える。

「私は降参すると言った覚えはない。サヤが勝手に背を向け、隙を見せた。私はその隙を逃さなかった。それだけのことだ」

薄墨は札を構えながらそう言った。

（私のせいだ…私が迂闊だったせいでハヤテが…）

己の犯した過ちに気付いたサヤは後悔に体を震わせた。白く柔らかな頬を熱いものが伝う。

「この痴れ者が…たとえそうだとしても、盲目の人間に不意打ちするなど…」

「勘違いされては困る。私はその盲目の人間に殺されかけたんだよ？」

冷笑を含んだ薄墨の言葉がサヤの心に突き刺さる。一瞬とはいえ薄墨に戦意を喪失させる程の力を見せつけたのだ。薄墨がサヤを警戒するのは当然だった。薄墨が隙あらばサヤを殺そうとしてもおかしくない。それに気付けなかったサヤの甘さが、愚かさがハヤテを傷つけたのだ。

「ハヤテ…下がってください。私が…」

「できないよ」

サヤに何も言わず、ハヤテは断りの返事をした。

「私はまだ何も…」

「予想はつく。私の代わりに戦う、と言うのだろうか？私に怪我をさせた責任を取る為にはそれしかない、と」

サヤの考えを見透かしたハヤテの言葉にサヤは返す言葉がなかった。

「心遣いは嬉しいが、サヤにはサヤの役目があるように私には私の役目がある。戦事は我が領分。たとえサヤでも、代われ、という命は聞けない」

「ですが、その怪我では…」

血の匂いとハヤテの声音。この二つから判断する限り、ハヤテの怪我は軽いものではない。命の危機に瀕する致命傷ではないとはいえ、薄墨とその式鬼を相手するのは難しいに違いない。

「右肩をやられた。だが、戦えないほど深い傷ではないし、そう柔な鍛え方をしたつもりもない。それに…」

そこでハヤテは一旦言葉を止め、サヤに微笑んだ。怪我をしている人間には見えない穏やかで優しい笑み。ここが戦いの場であることを忘れさせてしまうくらいの笑顔でハヤテは囁いた。

「私は死なないよ」

自信に溢れた表情と確信に満ちた言葉。サヤは何も言えなかった。

「武運を」

ただその一言で送り出すことしかサヤには出来なかった。

「飛閃っ！！」

薄墨の手元から鈍く輝く札が放たれた。一直線にハヤテを目掛けて伸びる白い光。ハヤテは左手を正面に翳して、風の障壁を作り出し薄墨の攻撃を防ぐ。

「ちっ…玄鬼っ！！」

薄墨が式鬼にハヤテへの攻撃を命じる。駆け出した玄鬼をハヤテが迎え撃つ。

「遅いつ！！裂風刃」

玄鬼の爪を間一髪で避けるとハヤテはそのまま踏み込み、玄鬼の腹部を狙って左手を振るう。

「ぐっ」

繰り返された風の刃が玄鬼の体を真つ二つに切り裂く。術者の薄墨の顔に苦痛の色が浮かぶ。

「式鬼にそんな攻撃が…」

「式鬼には効かずとも貴様には効くさ。どんな優れた術者でも術の“反り”を無くすことはできない」

そう言つてハヤテは次々に風の刃を繰り出し、玄鬼を切り刻んでいく。その度に薄墨の顔に苦痛に歪む。

「小僧がふざげた真似を…飛閃っ！！」

二条の光がハヤテへと伸びる。

「無駄だっ！！」

ハヤテは風で札を上空に逸らす。しかし、防御の為に一瞬できてしまった隙を玄鬼は逃さない。鋭い爪を振り上げ、ハヤテの脳天を狙う。勢いよく振り下ろされた玄鬼の爪がハヤテの真つ二つに引き裂いた、かのように見えた次の瞬間、ハヤテの体が揺らぎ、影のように消えた。

「残像だ」

ハヤテは振り下ろされた腕のすぐ横に立っていた。そして、そのまま左腕を振り上げた。

「裂風陣っ！！」

玄鬼を取り囲むように風の刃が乱れ飛ぶ。幾つの刃に切り刻まれ、再生する隙さえ与えられなかった玄鬼は核である札を切り裂かれ、細切れのまま煙のように消えてしまった。

「なるほど、数を撃てば当たるようだ」

玄鬼を倒したハヤテが薄墨に微笑む。一方の薄墨は式鬼を破られた

反動で片膝を地につけ、呻き声を上げていた。

「ハヤテ、貴様ああ！！来よ、幽鬼っ！！」

薄墨が新たに札を取り出し、式鬼を創り出す。玄鬼と同じ人型の式鬼だったが、その体は白く、背中には鳥のそれに似た二翼を備えていた。

「新しい式鬼、か…」

薄墨を護るように立つ幽鬼を睨みつけながらハヤテが呟く。

（ハヤテ、このままでは此方に勝機はありません。式鬼よりも術者を）

サヤの伝心にハヤテは無言で頷く。薄墨の術者としての力量はハヤテもサヤも測りかねていたが少なくとも、まだ式鬼を創り出せる余力を残していることは容易に想像がついた。

（たとえば、あの白い式鬼を倒したとしても薄墨はまた新しい式鬼を創り出す。持久戦だけは絶対に避けなければ…）

そんなことを考えながらハヤテは右腕の怪我を確かめた。軽く動かそうとしてみるが痛みで思うように動かせない。致命傷と呼ぶほど酷い傷ではないが、戦闘では使い物にならない。

（防御にも使えない、か…）

ハヤテは覚悟を決めると拳を構えた。張り詰めた気が寄り合わさっ

て一本の線となる。極細の線を切らないようにハヤテが間合いを詰める。一步、また一步と薄墨との距離を狭めていく。一方の薄墨は微動だにしない。新たに創り出した式鬼も術者に倣うように動かない。

(妙だな…)

無闇に動くのは上策ではないとはいえ、薄墨と幽鬼は動かな過ぎた。ハヤテを睨むその双眸に戦う意志が感じられない。

(…何かを待っている?)

獲物の隙を狙うかのような視線にハヤテの動きが固まる。

「薄墨、何を企んでいる…」

「何も」

薄墨が不敵に笑う。玄鬼を倒し、ハヤテが主導権を握ったかと思っただがそれはほんの一瞬のことだった。すぐに薄墨に主導権を奪われ、現に今も薄墨の動きに過剰に反応せざるを得なくなっている。

(ハヤテ、ここは一旦退くべきでは?)

(退いて…どこに行く?行く宛も頼る伝手もない私達がここで退いても逃げ続けるしかない)

サヤの伝心をハヤテが退ける。身を隠せる場所が他にあるならサヤの言う通り、この場は一旦逃げるといふ選択肢も考えられたがその逃げ場所がない以上、退くという選択は下策でしかない。

(ではハヤテ、私も戦います)

凜とした力強い響き。強い意志の込められた言葉だった。

(サヤ、しかし、それでは…)

決意を込めたサヤの声音にハヤテが焦り始める。普段はハヤテの言葉に大人しく従うサヤだったが、この声の時だけは決して退こうとしないのだ。

(サヤの役目はその命を賭して神剣を護ること。ハヤテに護られることではありません。退かないと言うのなら神剣を護る為に私も戦うのが道理ではありませんか。有無は言わせません)

反論を許さないサヤの言葉にハヤテは返す言葉がなかった。一瞬の思考の後、ハヤテは不服そうな顔でサヤに告げた。

(一旦…退く。サヤを戦わせるわけにはいかない)

(策はあるのですか?)

不安そうなサヤの心がハヤテに伝わってくる。

(なんとかかしてみせるぞ…)

ハヤテは心を決めると薄墨に言った。

「今からでも、神剣を渡せばサヤの身の安全は保証してくれるか?」

薄墨は一瞬驚いた表情を浮かべ、すぐに笑顔に変わった。

「今更取引など…と言いたいが、無駄な労力は極力省くのはが私の主義だ。いいだろう、神剣を渡せば剣の巫女に手を出さないと誓おう。神剣はどこだ？」

「祭壇の奥の黒い石棺の中だ。水の中に封じ込めてある。ちなみに、鎮めの巫女であるサヤにしか取り出せない」

ハヤテがそう言うのとサヤも小さく頷く。それを見た薄墨は舌打ちをしてハヤテを睨みつけた。

「その言葉、嘘ではないな？」

「自分で確かめてみればいい」

ハヤテの言葉に従い、薄墨は祭壇の奥へと足を進めた。古びた二本の細長い燭台に照らされた石棺は鏡のように黒々と磨き上げられ、その内を清らかな水で満たしていた。水底には黒く細長い剣が沈んでいた。刃渡りは八束ほどで、握り手まで含めるとその長さは十束を越える。柄と刃が一続きになった旧時代の神の遺産は封印の中にあつてなお、圧倒的な存在感を放っていた。

「これが神剣…」

水底の奥に眠っていてさえ、尋常ではない力を秘めていることが感じられる。全てを焼き尽くし、破滅に導く忌まわしき力。その力を求めてきた薄墨だったが、いざその力を目の前にと手を出すのに躊躇うものがある。

「…今更何を躊躇うものがある」

覚悟を決めて薄墨が水の中に手を伸ばす。しかし、薄墨の腕が水に触れた瞬間、水面が波立ち、神剣の姿をかき消してしまった。驚いた薄墨が腕を引き抜くと水面は元に戻り、石棺の奥底には神剣が何事もなかったかのように眠っていた。

「なるほど、巫女以外は触れられないというわけか…」

薄墨はそう呟くとハヤテ達の下まで戻り、サヤに言った。

「いいだろう。すぐに封印を解け」

「わかりました。ハヤテ、案内してくださいませんか？」

そう言って差し出したサヤの右手をハヤテが取る。それを見た薄墨が声を硬くして叫ぶ。

「なんのつもりだ？」

「サヤは目が見えない。私が付き添うのは当然だろう？」

ハヤテはそう言うとサヤに付き添って祭壇の奥へと進んでいった。

「サヤ、此方だ」

石棺の前まで辿り着いたハヤテはサヤの右手を水面に近づけた。サヤの手が水面に触れた瞬間、波紋が広がる。

(サヤ…)

(わかっています、ハヤテ…チャンスはほんの一瞬)

ハヤテの言葉に従い、サヤは祭壇の奥へと足を進めた。

サヤは小さく頷くと両手の水面に浮かべ、目を開いた。その瞬間、サヤの力に辺りの空気が揺れ始める。

「彼の者、深き水底に眠る。清らかなる腕の中、彼の焰もまた眠る。仮初めの鞘、一刻の鎮めをもたらせど、彼の者の渴きを満たすこと能わず。時は満ち、鞘はたゆたい、溢れ、流転する。示せ、彼の者が真に安らぐ在り方を。解き放て、彼の焰の赴くままに。そして、胸の内にて眠れ」

一瞬の沈黙の後、神剣が沈んでいた石棺の水が一気に蒸発し、真紅の炎が石棺から昇り、天を貫く。溢れ出る魔力が炎に変わり、本殿全体が瞬く間に火の海と化した。

「な、何だっ!?!」

予想外の事態に薄墨が慌てふためく。しかし、それに答える者はいない。ハヤテは気を失ったサヤを左腕で抱えながら宙に浮かび上がっていた。

「ハヤテ、貴様あ!! 逃げるのか!?! この卑怯者がっ!?!」

「返す言葉もないな…だが、サヤを護る為なら卑怯者と罵られても構わない」

ハヤテはそう言い捨てると燃え上がる本殿の天井を突き破り、脱出

した。

「幽鬼、奴らを追えっ!!！」

白い式鬼が続いて飛び立つ。

「ハヤテ…この私を愚弄したことたっぷり後悔させてやる!!！」

鬼の形相で吼える薄墨を紅蓮の焰が包み込んだ。

『目覚めの刻』 F i n .

第三話『目覚めの刻』（後書き）

薄墨の魔の手から逃げ出したハヤテとサヤ

しかし、二人の背後に迫る白い翼

振りかざされた魔の手は必殺の一撃

絶対絶命の二人の危機を助けたのは…

次回、魔法少女リリカルなのは *striker* 闇の叡智と光の
右手

第四話『交錯する運命』

第四話『交錯する運命』（前書き）

どうも月兔です。

作中では真冬の一月末という設定なのに現実には真夏の八月…。なんでこんなややこしいことにしたんでしょうね、本当に。おかげで描写がなんだか違和感が…

以上、作者の他愛ない雑談もとい、愚痴でした。読者の皆様は気にしないでね

では、第四話をどうぞ！！

その手の力は何の為の力か…

全てを撃ち抜く力

大切な人を守る力

運命を切り開く力

世界を変革する力

魔法少女リリカルなのは *Strikers* 闇の叡智と光の右手、
始まります

第四話 『交錯する運命』

第四話 『交錯する運命』

燃え盛る刀隠神社から離脱したハヤテは腕の中で眠るサヤに目をやった。服が多少焦げ付いているものの大きな怪我はしていない。気を失っているだけで命に別状はないようだった。

（神剣の封印を解放した反動、か…だからサヤには戦わせたくないんだ）

単純な魔力量はハヤテよりサヤの方が圧倒的に多い。魔法の威力に關しては言うまでもない。しかし、サヤの魔力は人が扱うには強力過ぎた。人の扱える限界を遙かに越えた力を持った代償は決して小さいものではなかった。サヤがほんの少し封印を解くだけでその力はハヤテの全力に匹敵する。その反動がどれほどのものかは想像に難くない。

「とりあえず、安全に休める場所を探さないと」

ハヤテは先ほどまで立ち上っていた火柱に目を向けた。炎はほとんど消え、今は黒い煙となつているものその凄まじさを思い返すだけで背筋が寒くなった。更に恐ろしいことはあの天を焼く業火さえも封印から洩れた余波に過ぎないのだ。

（これが『神剣』の力、か…）

神剣の力が完全に解放された時のことを想像したハヤテは身震いする思いだった。しかし、立ち止まっている時間はない。薄墨の手か

ら逃れられたわけではないのだ。それはわかっていたが、すこし油断していたのも事実だった。

背後から迫りくる白い影。そして、振り下ろされる爪。一瞬だけそれに気付くのが遅れた。

回避しようとしたが、サヤを抱いているせいでいつもより動きが鈍い。

（かわしきれない!!）

幽鬼の攻撃を覚悟した次の瞬間、桃色の光弾が幽鬼の体を貫いた。それも一つや二つではない。十を超える光弾が幽鬼を穿つ。光が収まった時、もはや幽鬼はその原型を留めていなかった。

ハヤテが辺りを見渡すと五十メートルほど離れたところに二人の女性がいた。一方は白を基調とした優しい感じの服に淡い栗色の髪をツインテールにし、左手には金属製の杖を持っている。もう一方は白いマントに軍服を彷彿させる黒い服、輝くような金髪を同じくツインテールにまとめ、黒い斧を構えていた。

「お前達…一体何者だ？」

ハヤテは鋭い眼差しで突然現れた二人を睨みつけた。幽鬼を倒してくれたことはありがたかったが、それだけ二人を敵ではないと判断することはできなかった。

（正直、この状態で三人相手に戦うの勘弁して欲しいものだが…）

不意を突いて逃げ出したはいえ、薄墨を倒したわけではない。この場に長くいればそれだけ再び薄墨に襲われる可能性は高くなる。ハヤテを最悪の結果を想像しながらハヤテは二人と距離を取る。ハヤテ一人ならともかく、気を失っているサヤを抱えたまま戦うことは不可能だ。逃げるしか選択肢はない。

「私はフェイト・T・ハラオウン」

「同じく、高町なのはです。少しお話、いいですか？」

二人ともハヤテに対して警戒した態度をとっている。武器を構えているもののハヤテに対する敵意は感じられない。未知のものに対する不安と恐怖、好奇心、その他諸々のり混じった二人の眼差し。

「あいつの仲間、ではないようだな？」

「「あいつ？」」

二人の声が重なる。

「なるほど、薄墨のことは知らないようだな。後ろの化け物を造り出してる術者のことだ」

そう言ってハヤテが二人の後ろを指差した。なのはとフェイトがハヤテの指差した方を見ると、体の再生をほぼ終えた幽鬼がいた。

「うそ…なのはの直撃を受けたのに…」

フェイトが信じられないものを見る目つきで幽鬼を見つめた。原型

を失うほどのダメージを受けていたのは紛れもない事実だ。それがほんの数分も経たないうちに何事もなかったかのように回復している。そのスピードは回復能力が高い、という言葉で説明できる限界を超えていた。

「…お前達、式鬼を知らないのか」

驚く二人にハヤテが尋ねる。この二人が薄墨に繋がる人間なら式鬼を知らないはずがない。そして、二人の反応は演技のようには見えなかった。

「式鬼は式神の一種で、核を破壊しない限り何度でも再生する厄介な相手だ」

(式神、式鬼…私達の知らない魔法系統みたい…どうする、なのは?)

(詳しく話を聞いてみたいけど、あれをどうにかしないとね…)

なのはとフェイトは式鬼を見ながら念話で話し合う。なのはのアクセルシューターの直撃を受けたにも関わらず、すぐに再生してしまつた白い化け物。未知の術式により構成された式鬼を倒す為には目の前の女性に話を聞くしかない。

「あいつを倒すにはどうすればいいの？」

「核を破壊すればいい。式鬼の再生力の源、体を構成する核を破壊すれば式鬼は消滅する」

フェイトの問い掛けにハヤテは答えるがその表情は固い。核を破壊

すればいい、口で言うのは簡単だが、それを実行することがどれほど困難なことなのか二人は知らないのだ。

(二人に式鬼の相手はさせられない…)

「すまないが、サヤを…この方をよろしく頼む。気を失っているが、命に別状はない。安全な場所へ連れていってくれ」

「わかりました」

なのはがハヤテからサヤを受け取る。和服姿のせいか大人びてみえるが、よくよく見てみるのはやフェイトより少し若い。煤で汚れているものの艶やかな黒髪の美しさは損なわれることなく、少女の体は羽のように軽く、重さを感じさせない。しかし、ハヤテの表情を見ればこの少女がハヤテにとって如何に大切な存在であるか判る。

「必ず安全な場所まで連れていきます」

なのはの言葉にハヤテは一礼し、二人に背を向けた。

「あなたはどうするんですか？」

そう聞いてしまって、フェイトは少し後悔した。振り返ったハヤテの表情を見れば何をするかなど聞くまでないことだった。覚悟を決めた表情。双眸に宿る不屈の志。それは闘う者の瞳だった。

「無論、奴を倒す」

そう言ったハヤテは申し訳なさそうな顔をしていた。

「二人とも巻き込んですまなかった。逃げるのに十分な時間は稼ぐ式鬼と向き合ったままハヤテは謝罪の言葉を口にした。それを聞いた二人は驚いて顔を見合わせ、そして、どちらからともなく微笑んだ。

「勘違いしないでください」

そういつてフェイトがハヤテの横に立つ。

「私もフェイトちゃんも、逃げるつもりないですよ」

その反対側にはなのはが立つ。

「おい、お前達……」

驚いたのはハヤテだった。どういう経緯で二人がここに来たのかは知らなかったがサヤやハヤテに用があつて来たはずがない。その二人を巻き込んでしまった責任はとるつもりだった。少なくとも、二人が逃げる時間は確保する、その覚悟だった。

「あなたには聞きたいことがたくさんあります。あの白い化けものを倒した後で必ず聞かせてもらいます」

フェイトの言葉にハヤテは大きなため息をこぼした。顔こそ違うが今の二人の雰囲気は言い出したら聞かないときのサヤにそっくりだった。

「二人とも無理はするな。危なくなったらすぐに逃げる。特に、なのは…でよかったか？サヤのこと、頼んだ」

「大丈夫だよ。なのはの…管理局のエースオブエースの力は伊達じゃないんだから」

不安そうなハヤテを励ますようにフェイトが言葉をかける。しかし、フェイトの言葉を聞いた瞬間、ハヤテの顔色が変わった。

「今…管理局と言ったか？」

僅かに硬くなったハヤテの声を掻き消すようになのはの声が鋭く響く。

「フェイトちゃん、気を付けて。来るよっ!!」

その言葉にハヤテは軽く頭を振り、思考を切り替える。考えたいこと、考えなければならぬことは山ほどあるが幽鬼を倒さなければそれさえも出来ない。右肩が疼くがそれも一緒に振り払ってハヤテや幽鬼を睨みつけた。

「あ、そうだ…私達まだ、あなたの名前聞いていなかった」

思い出したようにフェイトが呟く。そういえばそうだと、思い出したハヤテが自分の名前を名乗る。

「ハヤテ、だ。刀隠ハヤテ」

「えっ……えええええっ!?!」

一瞬、驚愕。そして、束の間の沈黙の後、絶叫。二人の声に張り詰めていた緊張が一気に解けた。

「…どうした？」

そこまで変な名前ではないはずだと思っていたハヤテは訝しい顔で二人を見た。

「えっと…その、なんでもない」

「そう、なんでもない、なんでもない」

二人とも乾いた笑いでその場を誤魔化そうする。余談だが、自分の名前が二人の上司であり、友人である女性と同じ名前だとハヤテが知るのもうしばらく先のことである。

第四話『交錯する運命』（後書き）

雪の舞う戦場 ソラ で出逢った風と雷

立ち向かうは不死身の化け物

白き翼を羽ばたかせながら悪魔は微笑む

疾風と雷光が天を翔け、敵を打ち砕く

次回、魔法少女リリカルなのは *striker* 闇の叡智と光の
右手

第五話『風神と雷神、そして白い悪魔』

第五話『風神と雷神、そして白い悪魔』（前書き）

月兎です。五話目です。久々の戦闘です。

題名にある風神と雷神はもちろんハヤテとフエイトです。

白い悪魔は誰かって？それは皆さんのご想像にお任せします。

では、第五話をどうぞ

昔からずっと考えていることがある

強さ、とは何なのか

腕力や魔力？権力や人脈、才能？

それとも精神的なもの？

答えはまだ、わからない

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手、
始まります

第五話 『風神と雷神、そして白い悪魔』

第五話 『風神と雷神、そして白い悪魔』

三人が式鬼と対峙する。サヤを抱えたなのはの守るようにハヤテとフェイトが前に立つ。布陣と呼ぶにはあまりに頼りないが三人の顔にそんな弱々しさは微塵も感じられない。

「バルディッシュ、ハーケンフォームっ!!!」

フェイトがデバイスを近接戦闘用に変形させる。長斧状の先端が変形し、鎌を模した形状になる。フェイトの魔力光と同じ黄金の魔力刃が式鬼を牽制するように鋭い輝きを放つ。

「私が後方から支援射撃、フェイトちゃんとハヤテちゃんは、あう、えっと…じゃなくて…」

友人と同じ名前だったせいで普段と同じように呼んでしまったのはは慌てて言い直そうとしたが、ハヤテ自身がそれを遮った。

「好きに呼べばいい」

怒っているつもりはなかったが、不愉快さが声に出してしまったらしく、ハヤテが思っていたより冷たく響く。

「ごめんなさい。それじゃ、フェイトちゃんとハヤテ…さんが前衛で」

「うん」

「心得た」

また間違えかけたようにも聞こえたがハヤテは無視し、式鬼へ向かう。ハヤテとフェイトが二筋の光となって、式鬼へと向かう。

「裂風刃っ!!」

風の刃が空を翔ける。しかし、式鬼は腕を一振りしてハヤテの攻撃を相殺する。式鬼の攻撃はそれだけで終わらない。振りかざした腕が伸び、鞭のようにしなる。勢いのついた鋭い爪がフェイトを襲う。

「えっ!？」

予想していなかったミドルレンジからの攻撃。フェイトはそれをバルディッシュで受け止める。速さと重さを伴った一撃。魔力刃と式鬼の爪が拮抗する。鎌の刃は僅かに食い込んでいるものの、それ以上進みそうにない。

「思ってたよりも固い…でも…」

フェイトがバルディッシュを握る手に力を込める。魔力刃が強い光を放ち、稲妻がほとばしる。

「てやあああっ!!」

金の魔力刃が閃き、式鬼の右腕を切り落とす。式鬼に反撃に転じる間を与えずにハヤテの風刃が左手を切り刻む。式鬼が声にならない悲鳴をあげる。

「やった」

「いや、まだだ…」

両腕を失った式鬼はすぐに体の再生を始める。

「再生する前に片付けるぞっ！！」

「うん」

フェイトが左手を式鬼に向ける。環状の魔法陣が展開し、金色の魔力弾が生成される。それは周囲に稲妻を撒き散らしながら、激しい光を放つ。フェイトが狙いを定め、必殺の砲撃を放つ。

「プラズマ…スマツシャーあああっ！！」

稲妻の如き凄まじい砲撃。単なる魔力だけではなく、稲妻を纏った一撃はいとも容易く式鬼の体を貫いた。

「見つけたっ！！裂風陣っ！！」

穿たれた体の奥に核である札を見つけたハヤテは狙いを定め、無数の斬撃を放つ。札のある空間を幾つもの風の刃が包み込み、切り刻んでいく。核を失った式鬼が煙のように消える。

「倒した…んだよね？」

脅威的な再生力を目の前で見たフェイトが不安そうに尋ねる。消滅

したはずなのに今にも再生してきそうな、そんな予感がした。戦いはまだ終わっていない、その不安を打ち消すようにハヤテは笑う。

「ああ…手伝ってくれてありがとう、フェイト。なのはもサヤを守ってくれてありがとう」

翔け寄ってきたなのはとフェイトに礼を言うと二人とも笑いながら首を横に振った。

「私はたいしたことしてないよ。戦ったのはフェイトちゃんとハヤテちゃんだよ」

「好きに呼んでいい、とは言ったがハヤテちゃんはやめてくれ。男でちゃん付けは流石にな…」

なのはの言葉に苦笑混じりの表情を浮かべるハヤテ。そんなハヤテを見つめる二人の顔は驚いている、としか言いようのない表情だった。

「どうした、二人とも？そんな豆鉄砲を喰らったような顔をして」

「え、えーと…だつて…」

「ハヤテちゃん…」

二人とも金魚のように口をパクパクさせている。まるで、目の前で信じられないことが起きたかのように。

「男だったのおおおお!?」

二人の絶叫が見事に八毛る。

「女だといったつもりはないが?それに、服でわかるだろう?こんな色気のない服を…」

ハヤテが着ているのは口元まで覆う襟の長い灰色の肌着と黒の和装束で、ハヤテの言う通り女物の服装ではない。

「でも、髪だつてそんなに長いんだよ!?それにすごく美人だし」

ハヤテの髪が風になびいてふわりと舞う。なのはやフェイトの髪もかなり伸ばしている方だが、ハヤテの髪はそれ以上に長い。一つに結われた髪先は脚の付け根まで伸びている。艶やかな黒髪はただ無造作に伸ばしただけではなく、よく手入れされていることが見るだけでわかる。

「これはまあ、家の事情というやつだ。それに、美人というのなら私より二人の方がずっと美人だろう?」

ハヤテに真顔で美人と言われた二人は思わず赤面してしまう。ハヤテを女だと思っていたときは綺麗だな、としか考えていなかったが、男だと判った途端、必要以上にその容姿を意識してしまう。

「おい…二人とも顔が赤いようだが、大丈夫か?」

自身の言葉が原因で二人が赤面しているとは思ってもいないハヤテが二人に尋ねる。

「だ、大丈夫…それより、ハヤテに幾つか聞きたいことがあるんだけど…」

ハヤテは頷こうとし、すぐに顔を強ばらせた。

「悪いがそんな余裕はないようだ」

低く響くハヤテの声に二人はデバイスを構えて警戒態勢をとる。

「新手…あの白い化け物を操っていた人？」

「ああ、間違いない。この気配、薄墨だ」

空を静寂が支配する。ハヤテとフェイトはなのはを囲むように体勢を整え、辺りを警戒する。

「ハヤテ、その薄墨ってどんな人？強い？」

「符術を使うからな…接近戦なら私に分があるが、離れて戦われるとかなり厄介な相手だ。それに式鬼も遣ってくるから正面からぶつかりたくはない」

（符術…また私達の知らない魔法だね）

（うん…だけど、ハヤテがこんなに警戒するってことは相当の実力者だよ、きつと）

フェイトがハヤテの表情を見る。

油断も隙もない、研ぎ澄まされた刃のような鋭い視線。その表情は

フェイトのよく知る烈火の剣士に通じるものがある。

(SS+ランクの魔力反応…フェイトちゃんはハヤテさんだと思う?)

(…動きは速いけど、さっきの攻撃の魔力ランクはAくらいだったから…多分、別人だね)

(それじゃ、やっぱり…)

(うん、その薄墨って人がSS+の力の持ち主の可能性が高いね) デバイスを握る二人の腕に力が入る。魔力リミッターの掛かっている二人の現在の魔力ランクはAA相当。ハヤテの実力を今の二人と同程度であるとするなら、オーバーSランクの相手をすることは自殺行為に等しい。SS+という値が本物であるならリミッターを完全解放したなのはフェイトでさえ危うい。二人の緊張を感じ取ったのかハヤテが幾分遠慮気味に言った。

「今からでも遅くない。二人ともサヤを連れてこの場から離れる」

二人は一瞬驚いた表情を浮かべ、お互いに顔を見合わせ、微笑んだ。先程までの緊張が嘘のように消えた穏やかな笑顔だった。

「どんな敵が相手でも私達は負けない。私となのはが力を合わせて出来ないことなんてないんだから」

「そうそう。今まででもずっと、そして、これからもきつと。だから、大丈夫だよ」

不安の影は見事に消えていた。自信に溢れた二人の表情を見て、ハヤテは二人に余計なことを言ってしまったと後悔した。

「いらぬ心配だったか…」

ハヤテは一人呟いた。そして、僅かに緩んでしまった気を引き締め、薄墨の気配を探る。

風の力を操るハヤテにとって見えない敵の居場所を探ることは難しいことではない。しかし、右肩の痛みと出血がハヤテの集中力を掻き乱し、本来の力を発揮することが出来ない。臆気に浮かんでは消える薄墨の気配。気持ちだけが焦り、ハヤテの気力のゆっくりと、しかし、確実に奪っていく。

「ハヤテこそ大丈夫？右肩、怪我しているんでしょ？出血がひどくなってるよ」

「問題ない…」

心配するフェイトをハヤテが無表情で一蹴する。しかし、その表情とは裏腹に言葉に覇気がない。

「問題ないはずないよ。そんなに血を流して…」

「私の怪我なら心配しなくていい。なのははサヤを守ってくれ」

ハヤテの言葉に覇気は全くなかった。しかし、そこにはなのはには有無を言わせない強さがあった。それは大切な人を護る為の、覚悟を決めた者の強さだった。

「…うん、護るよ。全力で。いくよ、レイジングハートっ！…」

風神と雷神、そして白い悪魔 F i n n .

第五話『風神と雷神、そして白い悪魔』（後書き）

迫り来る新たな敵

未知なる魔法

魔力を封じられたフェイト

その脳裏を浮かぶのは…

次回、魔法少女リリカルなのは *striker* 闇の叡智と光の
右手

第六話『約束』

第六話『約束』（前書き）

おはようございます、月兔です。
やっと六話です。

書きたいことがたくさんあり過ぎてまとまりきらない…設定とかや
やこしくし過ぎちゃったかも…とちょっと後悔。

これからも頑張って書いていくんで皆さん、応援よろしく願います。
感想やご意見お待ちしています

もう、二度と後悔したくない

何度もそう思った。

そうならないように努力してきた

だけど…

でも…

それなのに…

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手、
始まります

第六話『約束』

第六話『約束』

「来たぞっ!!」

ハヤテの声が空に響く。幾筋もの光が軌跡を描きながら三人に迫る。

「アクセルシューター…シュートっ!!」

桃色の光弾が飛び交い、薄墨の攻撃を迎撃する。しかし、アクセルシューターは炸裂することなく光に触れた瞬間に消えてしまった。

「嘘…!!」

なのはとフェイトが驚きの表情を浮かべ、ハヤテは舌打ちをする。

「二人とも逃げろっ!!」

鋭く響くハヤテの声。鈍い光を放ちながら飛び交う幾筋もの光。一本の光がフェイトの前を横切り、なのは達と分断される。フェイトを囲むように光が集う。

「ハーケンスラッシュっ!!」

フェイトはバルディッシュを振りかざし、光を切り裂こうとする。しかし、光に触れた瞬間、鎌の魔力刃が消えてしまった。

「えっ!?!」

デバイスが破壊されたのならまだ判る。飛び交う光にフェイトの想像していた以上の力が込められていたなら、それは十分に起こり得る可能性がある。しかし、魔力刃だけが消滅してしまうことがあるとは想像していなかった。驚いたフェイトの隙を突いて次々と光が襲いかかる。しかし、痛みはない。

「こ、これは!？」

光の正体は札だった。フェイトの体の至る所に貼りついた札が金色に光り出す。

「そんな、魔力がつ!？」

フェイトの体を覆っていた魔力が消えていき、バリアジャケットが強制的に解除される。事態はそれだけですまない。飛行に使っていた魔力まで消えてしまった。フェイトが、魔導士が空を飛べるのは言うまでもなく魔力のおかげである。その魔力が失われてしまったらどうなるか。答えは単純、堕ちるしかない。空を飛ぶ術を失ったフェイトもその例に漏れるはずがない。

(私、死ぬんだ…)

死が瞬く間にフェイトに近づいてくる。地面に叩きつけられるまであと数秒もないというのにフェイトは不思議なくらい冷静だった。

職業柄いつか死ぬかもしれない、それは判っていたつもりだし、覚悟もしていた。心残りはいくさんある。でも、今はもうどうしよう

もない。頭をよぎるのはヴィヴィオと交わした小さな約束。

(ごめんね、ヴィヴィオ…約束、守れなかった)

なのはとハヤテがフェイトを呼ぶ声が聞こえた気がしたが、もうどうしようもなかった。

フェイトは覚悟を決めてゆっくりと目を閉じた。

「フェイトちゃんっ!!」

フェイトが一人取り残されたことに気付いたなのはが戻ろうとしたが、それをハヤテが止める。

「なのははサヤを連れて離れるんだ。あの光に触れるんじゃないっ!!」

ハヤテの予想が正しければあの光は符術の一種で封魔符と呼ばれるものだった。本来は敵の攻撃から身を護る為に使われる為の札で攻撃に使われることはほとんどない。しかし、人に使えば封魔符の名が示す通り、貼り付いた札でその人の魔力を封じ込めてしまうことも可能であることをハヤテは知っていた。

「だけど、フェイトちゃんがっ!!」

「近づいたら二の舞になる」

二人が言い争っている間にフェイトのバルディッシュから魔法刃が

消え、続いてバリアジャケットが解除された。

「そういうことか…」

魔力空を飛ぶものが魔力を封じられたらどうなるかなど子供でも判る。しかし、封魔符を飛行魔法を使えなくする為に使うなどハヤテは今まで聞いたことがなかった。

「私が迂闊だった…」

封魔符の本来の用途から外れた使い方を目の当たりにしてハヤテが悔しそうに唇を噛みしめた。知っていればフェイトに警告することも出来た。この場から逃がすことも出来た。危険な目に合わせないことも出来た。

「フェイトちゃんっ!?!」

なのはの悲鳴が空に響く。バリアジャケットを強制的に解除され、封魔符を体中に貼り付けられたフェイトが重力に従い、地面に吸い込まれるように落ちていく。

「間に合ええええ!!」

ハヤテの叫びが聞こえた瞬間、その姿が掻き消えた。ハヤテはその身を淡い緑の光に変えてフェイトの元へ翔けた。

風を切る音が耳に響く。刻一刻と近づいてくるその時を覚悟していたフェイトだが、実際に地面が迫ってくると自然と身が硬くなる。地面とぶつかる瞬間、フェイトは目を閉じた。

全ての音と光が消える。

いつになっても痛みも衝撃も来ない。そして、優しいぬくもりに包まれた感覚にフェイトはゆっくりと目を開いた。

「ハヤ…テ？」

フェイトの目の前には安堵したため息をこぼすハヤテの顔があった。

「なんとか間に合ったな…立てるか？」

「あ、はい…えっ、あっ…」

そう言つてフェイトは小さく頷く。そこで初めてハヤテに抱きかかえられていることに気付いた。所謂、お姫様抱っこされている状態である。顔が赤くなっているのが嫌でも判る。

「あ、その、早く降ろして」

フェイトに急かされてハヤテはフェイトを地面に立たせた。

「ありがとう…」

「礼はいらない。それより、先に謝らせてくれ。巻き込んでしまつてすまない」

険しい表情でハヤテはそう言つた。その意味を図りかねたフェイトは周りを見渡してその意味を知つた。黒と白の式鬼が二人を取り囲むように立っていた。その数は十を越えている。その中から一人の男が姿を現した。所々焦げた灰色のスーツを着た男は不気味に笑つていた。

「薄墨…やはり生きていたか」

「実際、半分死んでいたよ。君たちが私の式を解いた反りで目が覚めたんだ。お礼を言わせておくれ、ハヤテ」

嬉々とした表情を浮かべる薄墨は不気味としか言いようがない。対するハヤテは怒りを隠すことなく相手にぶつけている。

「何故関係ない人間を巻き込んだっ！！」

「あながち無関係な人間でもない。『エースオブエース』高町なのはと『雷神』フェイト・T・ハラオウン。二方のご高名はかねがね」
そう言つて薄墨はフェイトに深々とお辞儀をした。

「二人を知っているのか!？」

「私も二人と同じ管理局の人間だ。当然のことだ。まあ、顔を見たのは今日が初めてだが」

薄墨の言葉にハヤテが驚きの表情を浮かべる。

「世界は君が思っているより狭い」

薄墨の不敵な笑いがハヤテを苛立たせ、フェイトを抱く腕に力が入る。

「い、痛っ、ハヤテ…」

フェイトの口から声が漏れる。しかし、ハヤテの耳には届かない。無表情のまま薄墨を睨みつけ、腕の力が弛むことはない。ハヤテの指が服越しにフェイトの体に食い込んでいく。

「ああ、ちなみに私達は同じ管理局の人間だが、私と二人は部署が違う。神に誓つて二人は神剣とは無関係だ。二人がここにいたのは偶々だ」

薄墨の言葉を聞いた瞬間、腕の力が若干弛んだ。その所作の意味にフェイトは背筋が冷たくなるのを感じた。

「疑った、の…私達を…」

驚きと非難の混じったフェイトの声。しかし、ハヤテは表情一つ変えない。まるでフェイトが存在していないかのようなハヤテの振る舞いにフェイトは傷付くことさえ出来ないほどショックを受けた。

「この二人と正面からぶつかって勝てる人間はそういない。私と違って管理局でも指折りの人材だ。私の式鬼を束ねても二人なら容易く打ち破るだろうね」

「だから奇襲か…卑怯者が」

薄墨を唇が皮肉な形に歪む。

「君の口からその言葉を聞くとは。笑わせてくれる。まあ、奇襲でどちらかを人質にしたいとは思っていた。それにしても、こんなに上手くいくとは思わなかったよ。君達は過大評価されてるんじゃないか。そうは思わんかね？高町なのは」

薄墨がそう言っつて顔を空に向ける。そこには砲撃準備を完了し、いつでも撃てるように狙いを定めたなのはいがいた。

「二人を解放しなさい」

「もちろん、断る」

そう言っつて薄墨は嫌らしい笑みをなのに向ける。

「君が抱えている女の子と交換なら考えないこともないがね。ちな

みに私が死んでも私の造った式鬼は消えないよ？君に比べるとゴミみたいな式鬼だけど、魔法の使えない人間を血祭りにあげるくらいには強い」

撃ちたいなら撃つてみる。薄墨は笑顔の下でそう告げていた。撃てば二人を殺す。そう脅されてしまえば流石のなのも手も足も出せない。

「おやおや、残念だかもう時間だ。高町なのは、お話はまたの機会にお預けするでしょう。心配しなくても二人を殺したりはしないよ、約束するよ」

胡散臭い笑みを浮かべる薄墨をなのはが睨みつける。薄墨の足元に大きな魔法陣が展開される。魔法陣を見る限りはベル力式の転移魔法。ここがミッドチルダなら六課のロングアーチが転移先を追跡することも可能だったが、生憎、ここは地球、海鳴市。今のなのはに薄墨の転移先を追跡する手段はない。このままでは見逃してしまう。しかし、なのはが追うわけにはいかない。それは最悪の選択である。どんな状況であつてもしてはいけないこと、それは最低の選択をしてしまうことである。それがわかつているからこそ、なのはは動けない。

「またお会いしましょう、エースオブエース」

優雅で、しかし、皮肉に満ちた笑顔だった。去り際にそう言って薄墨はハヤテとフェイト、大量の式鬼と一緒に光の中に消えていった。一人残されたなのはは悔しさに歯を噛みしめるしかなかった。

約束
F i n
·

第六話『約束』（後書き）

捕らわれてしまったハヤテとフェイト

二人を救出する為に機動六課が動き始める

そして、ついに彼女が目覚めます

目覚めた少女は孤独の淵に何を想うか…

次回、魔法少女リリカルなのは `striker` 闇の叡智と光の
右手

第七話『邂逅、再び』

第七話『邂逅、再び』（前書き）

月兔です。

お待たせしました。第七話です。

お楽しみください

では、どうぞ!!

時々、考えてしまうことがある

もしも、私が普通の女の子だったら

こんな力を持っていなかったら

きっと今と違う未来があったんだろうって

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手、
始まります

第七話『邂逅、再び』

「…機動六課が出てきた？」

驚きよりも不満が勝った青年の声。少女はそんな青年を見て愉快そうに笑った。

「ええ、予定外の事態でしょう？」

「確かに予定外だ。だけど、そんなことで僕を動揺させようたって無駄だよ」

青年は不敵な笑みを浮かべ、目の前に置かれたチェス盤からビショップを手に取り、少女のキングの右斜め前まで動かした。

「チェック」

「えっ！？嘘、ちょっと待ってよ。いつの間にビショップが其処にいたの」

青年の奇襲に少女が慌てふためく。青年は不敵な笑みを崩さない。

「最初からいたよ。君が駒を動かしてくれたおかげで、道が出来たんだ」

青年の指摘に少女が二手前の局面を思い出して呻き声をあげる。少女のキングにチェックをかけた青年のナイトを取る為に周りの駒を動かしてしまった。その駒運びがビショップに道を作ってしまった。

「君にはキングで僕のビショップを制するしか手は残されてないよ？そしたら、次の手で僕のクイーンでチェックメイトだ」

「うう、降参よ。私の負け」

少女に逆転の手はない。少女は潔く負けを認めると、青年に言った。

「で、機動六課はどうするつもり？」

「どうもしないよ。予定に変更はない」

青年は迷うことなく言い切った。まるで興味のないと言った青年の表情に少女は不安そうに言う。

「動かなくて大丈夫なの？相手はあの機動六課よ？」

「機動六課の戦力は確かに異常だ。隊長陣は皆S級で、普通の部隊なら隊長扱いされるはずのA級魔導師が一兵卒なんだからね。心配しなくても僕は機動六課を甘くみていないよ。だからこそ、今は動かない。不用意に動いたら、それこそ僕達の負けだよ。今の君のチエスみたいだね」

青年はそう言うのとゆっくり立ち上がった。ただそれだけの動作なのに、気品と優雅さが感じられる。

「とはいえ、挨拶しないわけにもいかないか：僕達は機動六課の隊長を一人“保護”しているんだからね」

第七話『邂逅、再び』

「……は…?」

目を覚ましたサヤはゆっくりと体を起こした。サヤの体には毛布がかかけられていた。寝かされているのは寢床の反発と硬さ、手触りから簡易ベッドの類のようだった。サヤは恐る恐る脚を床に伸ばす。滑らかで、冷たい感覚。材質までは詳しくわからないがタイヤやコンクリートではない。耳を澄ましてみるが部屋の空調の稼働音しか聞こえない。サヤは立ち上がろうとして、鈍い痛みで頭を押さえた。

「っ…私、確か…」

頭の中に思い浮かんだのは符術を使う男と式鬼、そして、生臭い血の臭い。いつも隣にいて、護ってくれた兄の傷付いた姿。

「ハヤテ…」

襲いかかってくる式鬼から、サヤを護りながら戦うハヤテ。そこでサヤの意識は途絶えていた。おぼろげに覚えているのは木の焼けていく匂いと燃え上がる焔の音。

「…封印が解けて、神剣が暴走した!？」

そう呟いたサヤは慌てて胸に手を当てた。胸の奥に疼くような熱い痛みを感じ、サヤは安堵のため息をこぼした。

（よかった。まだ、封印は生きている…封印から洩れた力が暴れただけだ）

しかし、洩れた力でさえ侮れないことをサヤは知っていた。無防備な人間を焼き尽くすことぐらい訳もない。たとえ、術を使える人間であつても無傷で済まない可能性は十二分にある。それほどまでに神剣の力は凄まじい。

「ハヤテ…どこにいるの？」

弱々しい声がサヤの口からこぼれる。薄墨と相對した時とはまるで別人のような泣き出しそうな細かい声。しかし、サヤが悲しみに浸る間もなく、部屋の扉の開く音がした。

「あら、やっと目を覚ましたのね？」

サヤは突然のことに驚き、警戒感を露わにする。しかし、聞こえてきたのは春風のように優しく、柔らかな若い女性の声であつたおかげで幾分警戒を緩めた。

「怪我はなかつたけど、体の調子はどうかしら？具合の悪いところはない？」

女性の手が伸びてくるのを感じ、サヤは思わず身を引いた。

「ごめんなさい、目が見えないのよね？安心して。ここは機動六課の医務室よ。私はシャマル。えーと、サヤ、ちゃんでよかつたかしら？」

機動六課。今まで一度聞いたことがない単語にサヤは首を傾げる。医務室という割には薬品の匂いがほとんどないことにも違和感を覚え、そしてなにより初対面であるはずのシャマルがサヤの名前を知っていたということに疑問を抱かずにはいられなかった。

「どうして、私の名前を？」

「なのはちゃんから…貴女を助けた人から聞いたのよ。そんなに警戒しないで」

サヤがシャマルを警戒していることが声に出してしまったらしく、シャマルが困ったように笑う。サヤの健康状態を確認しようにも当のサヤに警戒されてしまってはどうしようもない。

「…すみません。助けて頂いたことには感謝しています。ハヤテがいなくて不安でつい気が立ってしまっ…」

「あら？はやてちゃんなら部隊長室にいるわよ？」

シャマルが優しく笑いながらサヤに言った。

「本当ですか！？シャマルさん、今すぐ連れて行って頂けませんか？」

嬉しさと焦りが入り混じったサヤの声。場所さえ判れば今にも駆け出してしまいそうなサヤをシャマルがやんわりと宥める。

「サヤちゃん、健康状態に問題がなかったら、ね。そんなに慌てな

くてもはやてちゃんは逃げたりしないわ」

シャマルに宥められたサヤはほんのりと顔を赤らめて顔を下に向けた。我を忘れて声を上げてしまったことを恥じるようにサヤは小さく頷いた。

「じゃあ、サヤちゃん、そのままベッドの上に横になって」

「はい」

サヤはシャマルの言葉に従って、簡易ベッドの上に仰向けになる。着物の帯が少し邪魔に感じられたが検査の間だけ、と自身に言い聞かせて我慢する。

「心配しなくてもすぐに終わるわ。もし、サヤちゃんの体に何かあってもはやてちゃんに医務室に来てもらえるように私から頼んでおくから心配しないで」

「はい…ありがとうございます、シャマルさん」

機動六課隊舎 部隊長室

「ごめん、私が一緒にいたのに…何もできなかった」

「なのはが謝ることなんてねえよ。悪いのはその薄墨って野郎だ」

機動六課部隊長室には部屋の主である八神はやとフェイトを除いた隊長陣の三人が顔を揃えていた。表情は皆重く、なのはに至っては今にも泣き出しそうなくらい憔悴していた。

「そう落ち込んでも現状は変わらん」

なのはの様子を見かねたようにシグナムが口を出す。なのはは頷いてこそ見せたが表情は暗いままだ。先のJ.S事件でヴィヴィオが攫われた時でさえ気丈に振る舞っていたことを考えると、目の前でフエイトが捕らえられたことに、そして、何も出来なかったことに相当ショックを受けているようだった。

「いいかげん、気持ちを切り替えろ、高町なのはっ！！」

怒気さえ感じさせるシグナムの言葉と表情。まるで怯える子供のようになのはの肩がビクツと震わせる。

「シグナム、あかんよ、そんな言い方したら。なのはちゃんの気持ちも考えてあげなあかん」

「しかし、我々がこうしている間にもテストロッサは…」

冷静そうに見えたシグナムもやはり捕らわれてしまったフエイトのことが不安で堪らないのだ。

「わかってる。けど、今わたしらが慌ててもどうしようもあらへん。なのはちゃん達が見たこともない未知の術式に、不意打ちとはいえフエイトちゃんを捕らえられるだけの戦闘技術、異常なまでの再生能力を持った式鬼っちゅう化け物。不用意には動けへんし、この話を広めるわけにはいかへん」

「けど、きつとあいつらは気付くぞ？こういうことは妙に勘がいいからな」

ヴィータの言ったあいつらとは言つまでもなく、機動六課のFW陣の4人である。4人にはフェイトが捕らわれてしまったことはまだ伝えていない。情報が少なく、教えても無駄に不安を煽ることにしかならないというのが四人の出した結論だった。

「まあ、隠し通せるとは思てへんし、いつかは話すことになるやろうけど、その時は今やない。今は待つしかないんや」

今は待つしかないんや。静かにそう言い切ったはやての顔は悔しそうで、その気持ちは他の三人も同じだった。

フェイトの居場所が分かれば救出に向かうこともできるが、場所の分からない現状では不可能だ。はやての言う通り、相手が動くのを待つことしかできない。

「とりあえず、なのはちゃんが助けた女の子…サヤて言ったかな。その子が目覚めてくれたら相手のことももう少しはわかるんやけどな…」

はやてがそう呟いたとき、グリフィスから緊急の通信が入る。

「グリフィス君、どうしたん？」

「ルーンと名乗る男から八神部隊長に通信が…例の件について話したい、と言えはわかるとのことですが…」

「その通信、今すぐこっちに回して。それで通信元の逆探知急いで。」

あと、この通信を秘匿通信に切り替えて」

グリフィスの言葉を遮ってはやてが矢継ぎ早に指示を出す。グリフィスははやての勢いに戸惑いながらもその指示をこなしていき、すぐに部隊長室のモニターが切り替わる。

「はやてちゃん……」

「……こいつがフェイトちゃんを攫ったやつらや」

モニターに現れたのは二十歳に達しているかどうかといった年頃の若い青年だった。全身を黒一色でまとめ、顔に不釣り合いなほど大きな黒縁眼鏡をかけている。悪人面というには整い過ぎた中性的な顔立ちに嵐の前の曇り空のような灰色の瞳。人を射抜くような鋭さはないが、人を近寄せない冷たさがモニター越しに伝わってくる。

「はじめまして、八神二等陸佐。僕はルーン・ヘルメス。古代ベルカの王、賢王ヘルメスの末裔……そして、次代のヘルメス・トリスメギストスだ」

邂逅、再び Finn .

第七話『邂逅、再び』（後書き）

遂に姿を現した敵

ヘルメス・トリスメギストス

不気味に輝くその瞳の奥に

一体何を映しているのか

そして、サヤを待ち受ける残酷な真実…

次回、魔法少女リリカルなのは *striker* 闇の叡智と光の
右手

第八話『ファーストコンタクト』

第八話『ファーストコンタクト』（前書き）

こんにちは、月兎です。

うう、筆がなかなか進みません…

物語の構成とかもつと考えたいのに

拙い文章ですが、どうぞお楽しみください。皆さんのご意見、ご感想、ご指摘等々お待ちしております。

では、どうぞ

世界が大嫌いだった

身勝手な正義と偏見を振りかざして

己の無能を棚に上げて

無力さを人のせいにして

それを疑問に思わない愚か者達

だから、僕は世界が大嫌いだった

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手、
始まります

第八話『ファーストコンタクト』

第八話『ファーストコンタクト』

「僕はルーン・ヘルメス。古代ベルカの王、賢王ヘルメスの末裔…
そして、次代のヘルメス・トリスメギストスだ」

無機質なルーンの声にはやては思わず身を硬くする。意図した声なのか、それとも元々がこういう声質なのか分からないが感情を感じさせない声がこんなに不気味だということをはやては初めて知った。

「機動六課部隊長、八神はやてです」

「タヌキと化かし合いをするつもりはないから用件だけ伝える」

「誰がタヌキやつ！！初対面の女性に失礼やと思わんのかつ！！」

ムツとした表情ではやてがルーンを睨みつけた。

「言葉の綾だ。単刀直入に言うとそちらが保護している少女、サヤの身柄を我々に引き渡してもらいたい」

「あ、あの、フェイトちゃ…ハラウン執務官はどうしていますか？」

堪えきれなくなったようになのはが会話に割り込む。ルーンは少々不機嫌そうな表情を浮かべながら小さくため息をこぼした。

「質問で返さないでくれ、といたいたいところだが…まあ、いい。それも君達に話そうと思っていたことだ。先にそちらを話すとしよう」
ルーンはそこで一呼吸置いて、不敵に微笑みながら言葉を続けた。

「本日、我々は管理外世界にてロストログア関連の事故に巻き込まれたと思われるハラオウン執務官と現場にいた民間人を発見。二人の身柄を現在我々が“保護”している」

「二人とも無事なんやね？」

はやてが念を押すよう尋ねた。

「さあ？僕の担当分野じゃないからよく知らない。流石に死んではないんじゃないかな？」

ルーンは真実興味がなさそうに言った。

「ハラオウン執務官の安否については以上だ。さて、話を戻そうか。僕は君達の質問に、それも割り込みの、答えたんだ。次は君達が答える番だよ？返答がないならそれでも構わないけど」

ルーンの灰色の瞳が鈍く光る。威圧的なものはないが、その瞳がはやての言葉を詰まらせる。それはまるで蛇に睨まれた蛙のようだった。

「…まだ、目を覚ましてへん。引き渡すかどうかはあの子が目覚ましてから話して決める」

言葉を選ぶように、ゆっくりとはやてが答える。もちろん、はやてにサヤを引き渡すつもりはない。しかし、それをそのまま言えばこの話は決裂してしまうことは明らかだった。そうなると今のはやてがするべきことは一つしかない。正体不明の相手から出来る限り情報を引き出すことである。しかし、ルーンはその言葉を予想していたらしく、微かに笑うだけだった。

「明日、また連絡する」

「待つて。あんたらは管理局の人間なんやろ？なんでこんなことをするん？」

ルーンは眉一つ動かさずに皮肉な笑みを浮かべた。

「こんなこと？ハラオウン執務官と民間人を保護したことかい？僕は時空管理局の人間として当然のことをしたただけだよ」

どうやら白を切り通すつもりらしく、二人を保護するに至った経緯を飛ばしてルーンがはやてに言う。

「所属は？」

「言っただろ？ヘルメス・トリスメギストスだよ。まあ、JS事件を解決した奇跡の部隊、機動六課みたいに有名じゃないから知らないのは無理もないけど」

ルーンは無表情のままそう言った。はやて達を馬鹿にするような態度は感じられず、素でそう言っているようだった。それ以上は話してくれないと判断したはやては次の話題に変える。

「古代ベルカの王の末裔ってどういうことなん？」

「君にはベルカの友人がいるだろう？彼女達に聞いてみればいいよ。さて、もういいかな？本当は用件を伝えてお終いにするつもりだったのに……」

ルーンは疲れたようにため息をこぼした。

「待て。テスタロッサを保護していると言ったな？ならば、ただちに我々に身柄を引き渡すのが道理だろう」

シグナムがそう言うのとルーンはほの暗い笑みを浮かべた。殺気とも怒気とも違う、不気味で異質な気配が部屋を満たす。相手は画面の向こうにいる。それは間違いないのに、寒気が体中に纏わりつく。

「シグナム二尉、僕は保護したとは言ったけど二人がどういう状況にあるかまでは把握していない。もしかしたら、二人とも酷い怪我を負っていて動かせない状況かもしれない。それを無理矢理動かして彼女達の身に何かあっても知らないよ？それでもいいのかい？」

それは立派な脅迫だった。いつでもフェイト達を傷つけることが出来る、ルーンは遠回しにそう告げていた。シグナムは悔しそうに唇を噛みしめ、拳を握りしめた。仲間の命が敵の手の上で転がされているのに何も出来ない自分が腹立たしく思えた。

「明日、二人と話せて貰えんやるか？」

「いいだろう、手配しておく。ただし、そちらもサヤを出してもらおう。意識不明でも関係ない。いいね？」

ルーンの言葉にはやては黙って頷く。

「ああ、そうだ。この通信を逆探知しても無駄だから」

ルーンはそう言い捨てると通信を切った。

「申し訳ありません、八神部隊長。逆探知は失敗しました」

「…明日、また連絡があるはずだからそのときはお願いな。あと、時空管理局の中のヘルメス・トリスメギストスという組織について調べとってもらえるか？それに聖王教会の騎士カリムに連絡をお願い。賢王ヘルメスについて聞きたいことがあるって伝えてくれるか」

はやては指示を終えると小さくため息をこぼした。グリフィスは何があつたのか知りたそうな顔をしていたが、何も聞いてこなかった。黒いモニターが鏡となつてはやて達を映す。

「申し訳ありません。私が軽率な発言をしてしまったせいで…」

「構わへんよ。シグナムのおかげで現時点でフェイト隊長の無事は確認できた。とりあえず、一安心や」

自信たつぷりな様子でそう言い切ったはやてにヴィータが尋ねる。

「なあ、はやて、どうしてそう言い切れるんだよ？」

「もし、本当にフェイトちゃんが怪我しているならあんなことは言わへんよ。そや、なのはちゃん、ユーノ君に賢王ヘルメスとヘルメス・トリスメギストス、それと神剣について急ぎで調べるように頼んでもらえるか？無限書庫ならきつと手がかりがあるはずや」

「わ、わかった」

現状は何一つ好転していないが、はやての言葉で張り詰めていた空気が僅かに緩む。それに加えてシャマルからの念話が朗報をもたらした。

（はやてちゃん、サヤちゃんが目を覚ましから今から隊長室まで連れていくわ）

（おおきに。シャマル、部隊長室まで案内したってな。私らもその子に色々聞きたいこともあるし）

「なのはちゃんが助けた女の子、目を覚ましたそうや。もうすぐここに来るって」

はやてがそう言って数分と経たない内に部隊長室の扉が開いた。

「ハヤテっ！！」

扉が開くと同時に少女の声が部屋に響く。艶やかな黒髪が優雅に揺れる。滲み出るような少女の美質は着ている和服が所々焦げていることさえ忘れさせてしまう。合わせの隙間から覗く透き通るように白い肌はほのかに紅くなっている。

「申し訳ありません。ハヤテがここにいと伺ったのですが…」
部屋の重い空気を読みとったサヤが落ち着きのある抑え気味の声で四人に尋ねた。部屋に不釣り合いなくらい澄ました鈴の音のような軽やかな響き。声を抑えても生来の美質は損なわれない。
三人は互いに顔を見合わせ、なのはだけが慌てているような、困っているような表情を浮かべていた。

「はじめまして。私が機動六課部隊長の八神はやてです」

「えっ……兄様じゃない」

握手しようと手を差し出したはやてはサヤの変化に気付いた。顔が紅く染まり、そして、徐々に色を失っていき、青ざめ、絶望に変わっていく。小刻みに震える肩がシヨックの大きさを物語っている。

「…ごめん。私がみんなに言ってなかったせいだね」

苦しそうな表情のなのはがサヤに駆け寄る。理解を把握できない四人が首を傾げながらなのはを見つめた。

「なのは、どういうことだよ？」

戸惑いを隠せないままヴィータが尋ねる。なのははサヤを見つめながら、四人に事実を告げる。

「フェイトちゃんと一緒に捕まった民間人の人の名前もハヤテって言うの。たぶん、その子の家族：お兄さんなんだと思う」

なのはの言葉に四人とも驚きの表情を浮かべ、すぐに気まずそうな顔になる

「…ごめん。期待させてしまって」

はやてが申し訳なさそうに頭を下げる。

「別になのはやはやてが悪いわけじゃねえよ…」

そう言ったヴィータの声には普段のような刺々しさはなく、どこか弱々しい。なのはやはやてがサヤを直接傷付けたわけでも、何か責任があるわけでもない。それを理解しているからこそ、サヤは誰も責めない。否、責められない。

「ごめんね、あなたを傷つけるつもりはなかったんだけど…ハヤテさんはあなたのお兄さん？」

サヤは黙って頷いた。

「…私の方こそ皆さんにご迷惑をかけてしまつて…すみません。助けていただき、ありがとうございます」

サヤは俯きながら、唇を噛み締めた。唇から血が滲む。痛みで辛さを紛らわせようとするとその姿がひどく痛々しい。そんなサヤを目の前にしてなのははそつとサヤの手を取り、迷いを振り払うように首を横に振った。それはまるで、サヤへの謝罪のようだった。

「本当に、ごめん。今すぐは無理だけど、必ず会えるから…ハヤテさんを助け出してみせるから」

そう言ったなのはの中で何かが芽生えた。

（もう、落ち込んでなんていられない…この子の為に、立ち止まつてなんていられないっ！！フェイトちゃんもこの子のお兄さんも私が必ず救い出してみせるっ！！）

『ファーストコンタクト』 Fin .

第八話『ファーストコンタクト』（後書き）

ゆっくりと回り始めた物語の歯車

動き出した奇跡の部隊

捕らわれたフェイトとハヤテは

夜空に何を想うのか

月明かりに照らされて疵痕が疼き出す

次回、魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 闇の叡智と光の
右手

第九話『疵痕』

第九話『疵痕』（前書き）

お久しぶりです。月兔です。

約二週間ぶりの投稿：長かった

話自体はだいたい出来ていたんですが色々と忙しくて（汗

週一で投稿できるように頑張っていくので皆さん、よろしくお願
い
します。

ではでは、第九話のスタートです！！

振り返ればほんの一瞬

積み重ねた時間も、刻まれた言葉も

交わした想いも、譲れない信念も

過去という名の糸となり、鎖となり、

二人を結び、繋ぐ絆に変わる

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手、
始まります

第九話 『疵痕』

第九話 『疵痕』

フェイトの瞳に映っていたのは過ぎ去りし日々のフェイト自身だった。一人で寂しそうに星空を見上げるフェイト。アルフと使い魔の契約を交わした時のフェイト。なのはと戦うフェイト。鞭で打たれ、体中傷だらけになったフェイト。

(これは、一体…)

母親を救えなかった悔しさと悲しさの入り混じった表情。なのはと友達になった時の嬉しそうな照れた笑顔。別れを惜しむ涙の瞳。囁託魔導師試験直前の緊張した面持ち。まるでシャボン玉のようにフェイトの記憶の中の光景が一つ一つ浮かんでは消えていく。

嬉しい時、悲しい時、悔しい時。様々な記憶が鮮明に蘇る。

シグナム達、闇の書の守護騎士と戦った時。アリサやすずか、はやと友達になった時。なのははやて、皆で力を合わせて闇の書の暴走を止めた時。記憶の片隅に沈んでしまっていた他愛のない日常生活の記憶までがフェイトの目の前で走馬灯のように駆け抜けていく。

（ああ、あれだ。死ぬ前にそれまでの記憶が一気に溢れるっていう…）

誰から聞いたのか、と呟いてフェイトは慌てて首を横に振った。

「違う…私は助けられたんだ」

途端にフェイトの視界がぼやけ始める。あれほど鮮やかだった記憶は色彩の全てを失い、白黒写真に変わり果ててしまった。まるで世界そのものが朽ち果てていくかのように、空間にひびが入り、光の粒となつていく。初めは灯火のように小さかった光は次第に膨らみ、フェイトを呑み込むほどの巨大な塊になった。フェイトの視界に収まりきらないほど大きな塊が弾け、白い光が世界を埋め尽くした。

「…は…？」

頭が鈍く痛む。しかし、それを堪えてフェイトは体を起こした。ずるりと黒い上衣が肩から太ももへと滑り落ちる。フェイトの記憶が正しければこれはハヤテが着ていた服だった。ハヤテを探すようにフェイトが辺りを見渡す。石畳の床と、同じく石造りの壁、分厚く重そうな鉄製の扉。家具らしい家具は一つもなく、上を見上げると明かり取りの天窓が一つあるだけで、そこにも頑丈な鉄格子がはめられている。差し込む日差しがまだ日が高いことを告げていた。

「目が覚めたようだな」

フェイトが振り返ると、筒袖の単衣姿のハヤテが床に胡座をかいて座っていた。その姿にフェイトの口から安堵の声が零れる。

「ハヤテ…よかった、無事だったんだね」

「無事なものか」

苛立っているような、呆れたようなハヤテの声。よくよく見るとハヤテの右肩から腕にかけて大きな赤い染みができており、その上から布が巻きつけられていた。ハヤテが一人で縛ったのか、結びは緩く、赤く染まった右肩が痛々しい。ハヤテは何事もないかのように振舞っているが痛くないはずがない。フェイトの思わず言ってしまった一言がハヤテにとって不愉快なものに聞こえてしまうのも無理はない。

「ごめん。そういうつもりじゃなくて…怪我、痛む？」

「痛むが堪えられないことはない。気にしないでいい」

フェイトを突き放す木枯らしのような冷めた声。せつかく心配してあげたのに、と思いつながらフェイトはハヤテから顔を背けた。しかし、太ももにかかった上衣を見てもう一度ハヤテの方を向いた。

ハヤテの態度に納得出来ないものがあつたとしても助けてもらったことには変わりはないのだ。

「服、ありがとう」

そついつとフェイトが上衣を返そうとしたがハヤテは受け取ろうとせず、首を横に振った。

「夜はもつと冷える。着ている」

「でも、それならハヤテの方が薄着で…」

「いいから着ておけ」

ハヤテに押し切られ、服を返すことを諦めたフェイトは黒の上衣を羽織り直す。血の匂いが気になるが今は我慢するしかない。バリアジャケットならともかく、今のフェイトはただの私服である。襟や裾、袖口に白いファーをふんだんにあしらった大人っぽいデザインの黒いワンピースに高めのヒールの黒いブーツ。艶やかな金髪を結ぶのはフリルのついた黒いリボン。上から下まで黒で統一しているのに喪服のような重苦しさはなく、さりげなく施されたレースやフリルが可愛さと華やかさを添えている。ファッション性という点では申し分ない装いのだが、防寒対策という視点で考えるといささか心許ない。室内とはいえ、冬場のこの時期にこのままの格好で夜を過ごすのは危険である。魔法が使えない今のフェイトにとってハヤテの心遣いは素直に嬉しかった。

「ありがとう、ハヤテ…肩の布、縛り直すよ？一人で縛ったんでしょ？ちよつと緩んでるよ」

「…礼のつもりか？」

フェイトの善意の申し出をハヤテは冷たい言葉で返す。警戒心を剥き出しにしたその声にフェイトは少なからずショックを受けた。執務官という職業柄、フェイトは犯罪者と会う機会が多い。その時に浴びせられる視線に似たものがハヤテの声には宿っていた。初対面の相手にここまで露骨に警戒されたのは初めてのことだった。

「そんなつもりじゃないよ。単純な心配。ねえ…どうしてそんなに警戒するの？私が何かしたの？」

ほとんど敵意と呼んで間違いないハヤテの視線にフェイトは戸惑いを隠せない。警戒される理由が思い浮かばないのだ。

「お前が管理局の人間だからに決まっているだろう」

フェイトの背中を冷たいものが駆け抜けた。フェイトの中で何かが弾け、先程の記憶が鮮明に蘇る。薄墨の使った未知の術式。体中に貼り付いた札。突然消えた魔力。全ての魔力を封じられ、飛行魔法が使えなくなつたフェイト。ハヤテが助けしてくれなければフェイトはこの世にはいなかった。そのハヤテに向かって薄墨が告げた言葉。薄墨がフェイトやなのはと同じ管理局の人間である、という事実。その言葉を聞いてからハヤテは変わってしまった。

「あれは…あの人が勝手に言っただけで、あの人が本当に時空管理局の人かどうかなんて確かめようがないし…」

「お前が管理局の人間であることは変わらないだろう？それだけで十分だ」

管理局の人間というだけで疑われるなどフェイトに納得できるはずがなかった。

「そんな…それはいいがかりだよっ!!」

怒りの混じつたフェイトの声にハヤテは小さくため息をこぼしてから、幾分疲れた様子でフェイトに言った。

「熱くなるな。勘違いのないように言っておくが私はお前個人を疑っているわけではない。はっきり言うと、お前がどういう人間であるかということは今は問題ではないんだ。助けてくれたことは感謝している。今更、お前が私の寝首を掻くとは思っていない」

「じゃあ、どうして？感謝している、なんて口にできるならどうしてそんな態度をとるの？」

納得できない。非難めいたフェイトの視線がハヤテにその胸の内を告げる。助けてくれたことに感謝していると言いながら、フェイトへの態度には感謝の気持ちの欠片も見られない。

「善良な個人の集団が善良な組織とは限らない。そもそも、その時空管理局という組織が善良な個人の集団とは限らない。違うか？」

淡々とした口調でハヤテはフェイトに告げた。

「そ、それは…」

ハヤテの言葉がフェイトの胸を刺す。法と平和の守護者であるはずの時空管理局がその裏で汚いことをしているという事実を執務官として働くフェイトは幾つも耳にしていた。質量兵器やロストロギアの回収に関する違法行為。闇ルートへのデバイスの横流しや転売。非人道的な生体実験。金品を見返りにした犯罪組織への機密情報の漏洩。小さなものまで挙げればそれこそきりがない。

先のJS事件も背後には地上本部のトップ、レジアス・ゲイズ中将与時空管理局の事実上のトップ、最高評議会の暗躍があった。溢れ

出る怒りと悔しさ。ハヤテに言いたいことは幾つもある。しかし、ハヤテの言葉を覆せるほどの言葉がフェイトにはない。何も言い返せないフェイトを見つけるハヤテの視線は冷たく、一緒に式鬼と戦っていた時とはまるで別人だった。咎めるような無言の視線にフェイトは堪えきれなくなつた。

「…ごめんなさい」

出てきたのは謝罪の言葉だった。

「何故謝る？その身に恥ずべきことがないのなら堂々としていればいいだろう？この場を収める為だけに謝つたのか？それは私への侮辱だ」

怒気を孕んだハヤテの視線にフェイトは身を固くする。先程までの冷たい視線とは異なる、フェイトに対しての明らかな敵意と怒りがその瞳に宿っていた。

「そんなつもりじゃない…貴方の信頼を裏切ってしまったから、だから謝らないといけないと思つたの。私が謝るのもおかしな話だけど…同じ組織の人間としてあなたに謝りたかつた。だから、ごめんなさい」

フェイトはハヤテを真っ直ぐに見つめて、そう言った。正直な所、ハヤテと目を合わせたくはなかつた。ハヤテの瞳に映る拒絶の色を見るのが怖かつた。しかし、ここでフェイトが視線を逸らしてしまえばどんなに立派なことを言っても嘘にしか聞こえない。無言のまま、二人の視線がぶつかり合う。しかし、すぐにハヤテが視線を逸らして軽いため息を零した。

「サヤを預けた娘…なのは、と言ったか？彼女は信頼に足る人間なんだな？」

「えっ？」

一瞬、ハヤテの言葉の意味が理解できず、フェイトの口から気の抜けた声が零れる。

「だから、なのはという娘は信頼できるのかと聞いている。サヤの身の安全については信じていいんだな？」

「…私達を信じてくれるの？」

「ああ。今の私には何も出来ないからな。疑っているより、信じた方が少しは楽になれる」

観念したように呟くとハヤテは大きく息を吐き出した。たったそれだけのことしかしていないのに、機械のように冷たく、警戒心を剥き出しにしていた先程までとはまるで別人のように見えた。

張り詰めていた空気が一気に解ける。

フェイトの体を突き刺すような鋭い敵意も警戒心も嘘のように消えてしまった。信じる、と言ったハヤテの言葉は嘘ではなかったと考えたフェイトはハツとした。

（私も、ハヤテの言葉を疑っていたんだ…ハヤテは信じるって言うてくれたのに、それなのに私は…）

金鎚で後頭部をガツンと叩かれたような衝撃。そして、胸が締め付けられる苦しみ。喉の奥底から搾り出した声でフェイトが口を開く。

「ハヤテ、本当にごめんなさい。ごめん…なさい…」

「もう謝るな。そんな顔で謝られては私が困る」

ハヤテは心底困ったような表情を浮かべていた。ハヤテはフェイトの謝罪を先程の続きだと捉えたらしい。

違う、そうじゃないっ！！

フェイトの叫びが心の中で木霊する。しかし、実際に口は出せない。口に出す勇気がなかった。ハヤテにあれほどのことを言っておきながら、フェイトの方がハヤテを信じていなかった、などと言えるはずがなかった。ハヤテから怒られることよりも、折角信じてくれたハヤテの信頼を壊してしまうことが怖かった。怖くてできなかった。

（今の私、どんな顔をしてるのかな…）

ハヤテの表情を見てると不安になる。泣いてはいないはずだった。少なくとも涙は流れていない。しかし、泣き出したい気分であることは否定できなかった。全てを投げ出して大声で泣きたい、そんな気分だった。しかし、泣くわけには行かなかった。ハヤテの前で涙を見せたくなかった、というのも理由の一つだが、ここで泣いてしまえばフェイト自身が自分を許せなくなりそうな気がした。どうし

てそんなことを思ったのかフェイト自身もよくわかっていない。ただ、漠然と泣いたら負けのような気がした。

何に負けるのか、と自問する。
きつと、自分自身に、と自答する。

それは半分正解で半分間違っている。そうわかっていたけど、否、わかっていたからこそ、フェイトは考えることを止めた。少し悩んだくらいで判る答えではない。

「…ありがとう、ハヤテ。私達を信じてくれて」

フェイトはそう締めくくると、縋るようにハヤテの上衣をギュッと抱き締めた。

『疵痕』 F i n .

第九話『疤痕』（後書き）

ついに語られるサヤの秘密

そして、解き放たれる神の力

次回、魔法少女リリカルなのは *striker* 闇の叡智と光の
右手

第十話『剣と巫女』

少女が望んだのはささやか日々

だけど、神はそれさえ許さない

第十話『剣と巫女（前編）』（前書き）

こんばんは、月兔です。

書き始めたら思ったより長くなったので前後編に分けての投稿です。群像劇風の作品にしてみよう、ということでも時系列通りにおおよそ話が進みます。場面があつちに飛んだり、こつちに飛んだりしてちよつと読みにくいかもしれませんがご容赦を。

読者の皆様のおかげでアクセスが30000、PVも40000を越えました。これからも皆様の応援よろしく願います。

では、十話目をどうぞ

私は兄様のように賢くないし力もない

だから、何が正しくて、何が悪いのか

今、どうするべきかさえもわからない

私にできることは一つしかない

私の一番大切なものは何なのか

それを選んで、祈り、信じること

ただ、それだけ

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手、
始まります

第十話 『剣と巫女（前編）』

第十話 『剣と巫女（前編）』

「シグナム、今からすぐに聖王教会に行ってくれるか？賢王ヘルメスについての情報収集をお願いな」

「わかりました」

はやてに指示にシグナムが頷く。

「ヴィータ副隊長、あの子達のことお願いしていい？」

「あいつらには、なのはは急用ができたって言っとく。そんな顔のなのはを見たらあいつらだって心配するしな。心配すんな、フェイトは強い。これくらい、どつってことねえよ」

なのはを元気づけようとする力強いヴィータの言葉。なのはは大きく頷く。

「うん、そうだね」

「では、我々はこれで」

シグナムとヴィータは一礼して部屋から出ていく。部屋に残ったなのはとシャマル、そしてサヤの三人を見渡してはやては言った。

「サヤさん、目覚めてすぐで申し訳ないんやけど、幾つか聞きたい

ことがあるんや。ええか？」

優しい、しかし、有無を言わせない力強い言葉だった。

「はい、私もあなた方にお聞きしたいことがありますから」

サヤの固い表情にはやては申し訳なさそうに頷いた。そして、優しい笑みを浮かべた。目覚めたばかりのサヤに無理をさせるのは不本意だったが、そうせざるを得ない無力さを笑顔の下に押し隠し、はやてはそつとサヤの手を取った。

「立って話すのもあれやから、座って、座って」

サヤを椅子まで案内するとはやてはその真向かいに腰を下ろした。それに続いてなのは達も椅子に座る。

「まずはお互いに自己紹介からしよか。私はこの機動六課の部隊長を務めてる八神はやてです。サヤさんと同じ地球の海鳴市の出身や、よろしくな」

聞く者に威厳を感じさせるほど力強く、それでいて若さに溢れるしなやかさを持った声。優しさと荒々しさを合わせ持つ春告風のようなハヤテの声。

「よろしくお願いします。八神さん」

サヤが頭を下げる。

「次は私だね。機動六課でスターズ分隊の隊長と戦技教導官を務め

ている高町なのはです。私も二人と同じ海鳴市出身なんだよ。よろしくね」

清流のせせらぎのように清く、濁りのない澄み切ったなのはの声。迷いのない、純粹その響きの奥に眠る底知れない力を感じたサヤの口から零れ落ちた言の葉。畏怖、と呼ぶのが相応しいその力。

「星の…相」

サヤの口から紡がれた言葉をなのはは聞き逃さなかった。

「サヤさん、星の相って？」

「…あとでお話します。シャマル先生のお名前は先程お聞きしましたから次は私ですね？」

サヤの言葉に三人は頷く。

「…それではお話します。私のこと、私の力のことを。そして神剣のこと」

「刀隠サヤと申します。さっそくですが、八神さんと高町さんは刀隠神社をご存知ですか？」

サヤの言葉はなのは答える。

「一応、名前だけなら」

はやてもそれに同意するように頷く。なのは達の通っていた中学校の近くにあった神社が確か刀隠という名前だったような気がする。

しかし、思い浮かんだのはそれだけだった。学校の近くにあって、ということ以外にその神社に関する記憶が全く浮かんでこない。あるとすれば一つだけ。人を近寄ることを拒んでいるかのような、不気味ささえ感じさせる、独特の空気。不思議なことにそれしか印象に残っていない。はやてもなのはと同じ感想を持つたらしくなんとも言えない表情を浮かべている。

「覚えている、ということはやはり、あなた方も強い力の持ち主なのですね」

「それはどうということなん？」

サヤの言葉の意味を掴みかねたはやてが尋ねる。

「あの神社にはある種の暗示のような…呪術的な守りが施されているんです。並みの人間にはそこに在るということにさえ気付けないくらい強い術が」

「…そこまでして人目を避けなあかん、隠さなあかんモノがあった。つまりは、そういうことやね」

はやての言葉にサヤは頷いた。

「八神さんの仰る通りです。刀隠神社に張り巡らされた結界は御神体である『神剣』を隠す為の…守る為のもの。いえ、結界だけではありません。私やハヤテもある意味では神剣を守る為の存在と云っていいでしょう」

いつもなら冗談にしか聞こえないであろうサヤの言葉。しかし、それが事実なのだと納得せざるを得ない力がその言葉には宿っていた。

「一体神剣って何なの？剣一本を守る為にそこまでするなんて…」
なのはの言葉にサヤは一瞬、口を閉じた。そして、言葉を選ぶように、ゆっくりと言った。

「神剣とは神々の遺した力。この力はヒトの手には余る代物。死と破壊の力です。この世にあってはならない忌むべき力…」

サヤはそう言うとゆっくりと瞳を開いた。

淡い茶の瞳がなのは達を見渡す。切れ長のの、射抜くような鋭い眼差し。一見すると何の変哲もないように見えるが、長年の経験と勘が三人を身構えさせる。

「言葉で説明するより、実際に神剣の力をお見せします。そちらの方が判りやすいでしょう」

サヤは静かに微笑んだ。薄茶の瞳の奥で何かが渦巻く。得体の知れない、尋常ではない力。まるで部屋の空気が重さを持ったかのように三人に纏わりつく。

「これが…神剣の力…」

はやての額をひと粒の汗が伝う。息をすることさえ許さない緊迫感。戦場の第一線に突如として放り込まれたと錯覚してしまいそうになる。

(信じられへん…)

SSランクの魔力を持つはやてでさえ比べ物にならないほどの圧倒

的で絶対的な力。サヤの放つ力の質も桁も常識を凌駕していた。力を解放したサヤを目の前にして三人は驚くしかなかった。正直な所、これほどまでの力だとは想像もしていなかった。しかし、サヤの次の言葉に三人は更に驚くことになる。

「これで…三割、といった所です」

三人は本当に返す言葉を失った。サヤの言葉が真実であるならこの三倍以上の力をまだ秘めていることになる。

「これ以上は私自身、扱いきれなくて…もう、よろしい、ですか？」

苦しさを堪えるような声だった。その力の凄まじさばかりに気を取られて気付かなかったが、サヤの額には汗が滲み、疲労困憊といった様子だった。

「サヤちゃんっ!？」

サヤの異常に気付いたシャマルが駆け寄ろうとしたが、その意志に反して脚が全く動かない。そこで初めてシャマルは自身の体が震えていることに気付いた。シャマルの体がサヤの圧倒的な力の前に動くことを拒んでいた。恐怖で体が動かなくなるという話は何度も聞いたことがあるが、実際に自身の体が動かなくなったのは初めてのことだった。闇の書の守護騎士としてこの世に生を受けて数百年。シャマルは未だかつてこれほどまで圧倒的な力を目の前したことがなかった。

「大丈夫です…シャマル先生。慣れてますから」

サヤは苦しそうに笑いながら瞳を閉じた。その瞬間、部屋を満たしていた圧迫感が嘘のように消え去った。

「なんやねん、その力…」

はやては何も言えなかった。管理局の定める魔力基準とは全く別次元の力を見せつけられ、思考の整理が追いつかない。頭のどこかでこれは夢ではないか、とさえ思っている。しかし、首筋を伝う汗が現実であることをはやてに告げる。

（なのはちゃん、どう思う？）

（どつって聞かれても…）

はやてからの念話になのはも返す言葉がない。桁違いの魔力を見せつけられては流石のなのはも驚くしかない。

（海鳴市にこんなものがあつたなんて信じられないけど、ロストロギアだとする危険度は一番上の代物…管理局が無理矢理回収しようとしてもおかしくはないかな）

サヤの力は一步間違えば次元震さえ引き起こしかねない。人間一人の魔力で次元震が起こせる、とは思いたくもないがあので三倍以上の力があるのならそれも不可能なことではない。

「サヤさん、その力はサヤさん自身の力やのうて神剣の力…て考えててええのか？ってサヤさん、顔真つ青やん！？」

ハヤテの言う通り、サヤの顔は蒼白で生気が感じられなかった。か

ろうつじて命を繋いでいるといった様子だ。シャマルが駆け寄るが、サヤは首を横に振る。

「休めば：大丈夫です。今は、八神さん達に神剣のことをお話することのほうが先：休むなんて後からでも出来ますから」

疲れきつた弱々しいサヤの声。今にも倒れてしまいそうなその表情にシャマルも口調を僅かに強め、サヤの手を取る。

「ダメよ。機動六課の医官として、それは認められないわ。サヤちゃん、早く医務室へ：」

「嫌です！！」

サヤがシャマルの手を振り払う。

「私のせいでハヤテが捕まってしまったのに私だけが安全な場所で休むなんて：そんなことできません！！そんなこと、できるはずが……」

サヤの瞳には涙が浮かんでいた。故意でないとはいえ、期待を裏切られて辛かっただろう。悲しかっただろう。苦しかっただろう。しかし、その全てを抑え込んでサヤはここに座つたのだ。泣き出した気持ち無理矢理ねじ伏せて、ハヤテを助け出す為に何をすればいいのかを必死に考えて、力を解き放てばどうなるかを知った上でその力を見せた。その意味を考えるとなのはに言えるのは一つだけだった。

「シャマル先生：私からもお願いします。もう少しだけ、サヤさん

の言つとおりにさせてあげてくれませんか？」

「なのはちゃんまで…」

シャマルはなのはの言葉に随分ショックを受けたようで、信じられないものを見るようになのはを見ていた。

「シャマル先生の言うことは分かります。でも、サヤさんも必死なんです…お兄さんを助けたくて…だから、お願いします」

そう言つてなのはは頭を下げる。

「シャマル、私からも頼むわ。今はサヤさんの言つとおりにさせてあげてもらえんやろか？」

はやてがシャマルをじつと見つめる。

「はやてちゃんまで…」

なのはに続いてはやてもサヤの味方につき、今後はシャマルが泣きそうな顔になる。

「シャマル、私もなのは隊長もサヤさんのことが心配やないわけやあらへんよ。シャマルの言つとおり、すぐに休ませてあげた方がええと思うし、そうしたりたいよ。せやけど、サヤさんを見てみ…」

はやてにそう言われ、シャマルは仕方なくサヤに視線を戻す。生気を失つたような青白い肌。額に滲む汗。絶え絶えの吐息。今にも倒れそうなくらい儂げに見えるのに、シャマルの拒む意志だけは尋常

でないほど強い。

「サヤさんもな、私らと同じで大切な人を、お兄さんを助けたいだけなんや。そやから、少しだけ、な？」

はやてにここまで頼み込まれて断れるシャマルではない。納得し切れていない様子であったが諦めたようにため息をこぼすと三人に背を向けた。

「外で…待っています。話が終わったら呼んで、ください」

震える声と背中。それだけでシャマルにとってこの決断が苦渋を伴うものだったかが判る。

「ごめんな…シャマル、できるだけはやく終わらせるから」

シャマルは何も言わずに小さく頷いただけであった。

「シャマル先生…ありがとうございます」

サヤの声にシャマルは一瞬振り返ろうとしたが寸前で止まり、三人に顔を見せることなく部隊長室から出て行ってしまった。

第十話 『剣と巫女（前編）』 （後書き）

『剣と巫女（後編）』 に続く…

第十話『剣と巫女（後編）』（前書き）

おはようございます、月兎です。

後編は思ったより難産でした

それにしてもこの小説、StSと題名にあるのにスバル達FW陣が一度も出てきてないって…

すみません。月兎の技量不足なんです。だが、しかし…次の話で登場させます!!

それでは後編をどうぞ!!

第十話 『剣と巫女（後編）』

『剣と巫女（後編）』

「あとでシャマル先生に謝らないといけませんね……」

シャマルで出ていった後の部隊長室でサヤは眉間の皺に浮かべながら苦笑した。隠そうとしているがその頬は血色が悪く、一刻も早く休ませなければならぬことは二人の目にも明らかだった。

「サヤさん、シャマルにはあんなことは言っただけど、気持ちとしては私もなのは隊長も早く休んで欲しいんやからね」

「お心遣い、感謝します」

はやての言葉にサヤは深々と頭を下げた。目が見えないからこそ、人の心の機微を感じるのに聡い。はやての言葉の裏に隠された本心を見抜くことはサヤにとっては容易いことだった。

「ええよ、そんなことしてもらわんでも。助けたいという気持ちは私らも同じや」

はやてはそう言うつと軽く息を吐き、幾分真面目な顔でサヤに言った。

「続きを…神剣についてももう少し詳しく話してもらえるか？」

「はー」

サヤは小さく頷いてから、ゆっくりと話し始めた。

「はるか昔、神代の時代のお話です。父男神が母女神を焼き殺した末の火の神を斬り殺したと言い伝えられている剣。それが刀隠神社に伝わる御神体です。私達は単に神剣と呼んでいましたが、古い書物には焰の剣、神殺しの剣とかがかかっているものもあるそうです」

サヤの話になのはとはやてはお互いに顔を見合わせた。サヤの話はまるつきり神話である。事実とは信じがたい。しかし、先ほどの力は本物で無視できないものであり、二人は黙って続きを聞くことにした。

「斬り殺された火の神は尋常ならざる力をもっていたといわれ、火の神の血にまみれた剣には火の神の怒りや恨みとともにその力も焼き付いています。その力は天地を焼き尽くすと言われ、神剣を鎮められるのは剣の巫女、すなわち私だけです。鎮めの術を持たぬものが剣に触れると火の神の怒りが焼き殺します」

サヤのそこまで言うとき息を吐き出し、ソファの背もたれに倒れかかった。心なしか息は荒く、汗が首筋を流れていた。

「サヤさんっ!?!」

慌ててなのはが駆け寄るが、サヤは大丈夫だと言わんばかりに首を横に振る。

「目眩が少し…でも、大丈夫です、心配しないでください」

大丈夫そうにはとても見えないが、今のサヤは梃子で動かないこと

は明らかだった。

顔を合わせてまだ一時間も経っていないが二人はサヤの大まかな為人は把握できていた。一途で、何事にも負けない心。頑固で、無茶の一つや二つを厭わない覚悟。己の全てを賭けても貫き通す信念。そして、痛みを知る優しさ。

「必ずお兄さんは私が助けてみせるから…だから、約束して。絶対に無茶なことはしないで待っているって」

まるで懇願するような、諭すようなのはの言葉。

「私、無茶なんて…」

「無茶してるよ。今のサヤさん、お兄さんを助けたくてすごく無茶してる…不安な気持ちは判る。焦る気持ちも判る。私だって今すぐ飛び出して、フェイトちゃんを助けに行きたい。もちろん、あなたのお兄さんも」

サヤに言っている、というよりもなのはが自分自身に言い聞かせているようだった。サヤと同じか、あるいはそれ以上になのはの気持ちは強い。目の前で大切な人が攫われたのに何も出来なかった自分自身に対する失望と苛立ち。無力感と悔しさを噛みしめ、押し殺してこの場所にいるのだ。

「だけど、今はそれもできない。敵の正体も、居場所も、数も、いつ私達が動けるかもわからない。今のまま無茶を続けたら、助けに行く前にサヤさんの方が倒れちゃうよ。だから、無茶しないで待ってるって約束して。お願い」

言葉の端々から漏れるなのはの想い。サヤを心配する気持ちが痛いぐらいに伝わってくる。

「はい…わかりました」

優しい、しかし、有無を言わせないなのはの言葉にサヤは頷くしかなかった。

「さて、神剣のことはそれくらいでええやろ。今度はこっちの状況を話そうか。サヤさん、楽にして聞いてくれてええよ」

はやての言葉にサヤは小さく頷いた。

「まずは現状や。サヤさんのお兄さんとフェイト隊長を攫った連中の名前はヘルメス・トリスメギストス。管理局内の組織らしいんやけど、詳細は不明。今、こっちで調査中や。で、ついさっき向こうから連絡があつてサヤさんの身柄引き渡しを要求してきた」

「私を…?」

思いもよらないはやての言葉にサヤは首を傾げる。

「神剣に関する情報が欲しいんやろな。もちろん、要求は断つたし、無理にサヤさんを引き渡すつもりはないから安心してな」

サヤを安心させようと無理に笑顔を作り、平坦な声を出したはやてであつたが、盲目のサヤにそのような即席の演技が通じるはずもなく、固い表情のままサヤがはやてに尋ねた。

「他には？それだけ、ということはないでしょう?」

はやての心を見透かすような声。一見するとか弱い盲目の少女なのに、その声は聞く者に妙な威厳を与えるほどに強い。はやてやなのはがサヤのことを呼び捨てではなく、さん付けで呼ぶ理由もここにあった。外見だけ見て取れば、サヤは二人より年下である。しかし、時折見せる年齢不相応の、絶対の意志と言葉。外見に似つかわしくない、老成されたそれが呼び捨てにすることを躊躇わせる。

今の一言も、はやてに下手な嘘やごまかしは逆効果だと悟らせるには十分だった。

「はつきり言うなあ、サヤさんは…」

はやては僅かに苦笑した。

「嘘も方便、ということも場合によってはあるでしょう。それが悪だと子供のような否定するつもりはありません」

決定打となる一言だった。はやては小さく息を吐き出すと幾分冷めた口調でサヤに告げた。

「私は別に隠し事してるつもりはあらへんよ。嘘も言ってへん」

「ええ、それは十二分に承知しています。迷っていらっしやるのでしょう？どこまで私に言うべきか、どのように私に言うべきか」

「全部、お見通しちゅうわけか…サヤさんにはかなわへんわあ」

どこか自棄気味の笑い声だった。

「年季が違いますから」

真顔でそう言われてしまって、何も言い返すことのできないはやては笑うしか出来なかった。

「これが本物の巫女さん、か…」

現代の巫女のほとんどがそれらしい衣装に身を包んだアルバイトである。しかし、サヤはそのような格好だけの巫女とは違う。荒ぶる神に仕え、向かい合い、鎮め、祈ることを常とする本物の巫女である。神意を読み取る術を知るサヤにしてみれば、ただか十九の娘の相手の考えを読むことなど造作もないことに違いないだ。

「明日、向こうから連絡がある。その時はサヤさんにも出てもらうからそのつもりでいな」

はやての言葉にサヤは小さく頷いた。

「なのは隊長も言っただよりに敵に関してはわからんことばかりや。たとえ捕まってる場所が分かってても相手の目的や規模、背後関係に支援組織。調べなあかんことはまだまだ沢山ある。今日、明日に助けに行くちゅうのははっきり言って無理や。」

「はやてちゃん、そんなはっきり言わなくても…」

無慈悲とも取れるはやての言葉になのはが口を挟むが、サヤがそれをやんわりと止める。

「いいのです。私自身が望んだことですから。他には？」

「今話せるのはこれだけや。あと、フェイト隊長が捕まってることを知ってるんはさつきここにいた人間だけやから、そのつもりでいてな」

フェイトが捕まったことを他言無用であることをはやてが告げると、サヤは驚いた様子も見せずに頷いた。

「わかりました」

「ああ、一つ聞き忘れてた。神剣目当てで人が来始めたねはいつ頃からや？」

「半年…も経ってないですね。4ヶ月ほど前からです。もっとも、初めて来た時はそこまで積極的には見えませんでしたけど。二週間程前から急に、それこそ三日と置かずに」

サヤの言葉にはやての眉がピクリと動く。一寸、天井を見上げると軽く息を吐き出した。これで話は終わりだという雰囲気にはサヤとなのはも肩の力を抜く。

「それじゃ、何かわかったらすぐに連絡するから、今日はゆっくり休んでな」

「ありがとうございます。それと一つだけお願いが。杖を一本、準備していただけませんか？」

何故杖を、一瞬悩み、サヤが盲目であることを思い出してはやては軽く頷いた。

「目が見えへんからやね。わかった、こっちで手配しとくわ」

そう言うとはやては部屋にシヤマルを呼び込んだ。サヤの顔色を見たシヤマルはもの言いたげな顔ではやてとなのはを睨みつけたが、何も言わずにサヤの手を取り、部屋を出て行こうとした。

「そつだ、サヤさん、さつき言つてた『星の相』って何のこと？」

なのはの言葉にはやてとシヤマルの視線がサヤに集まる。どこか改まったような三人の態度にサヤは小さく笑いながらなのはに言った。

「そつ身構えることでもないですよ。私が勝手にそう呼んでいるだけですから。一言で言うなら、引力と言つたところでしょうか…：我知らず人や事件、運命さえも引き寄せる、いえ、惹きつける力。心当たりがありませんか？」

サヤにそう言われてなのはは頷くしかなかった。魔法と出逢つてもう十年以上の月日が経とうとしている。魔法との出逢いもそつだが、それからの十年は客観的に見て、もちろん主観的に見ても、波瀾万丈の十年だった。それを出逢つて一時間も経たない少女に見透かされたことになのはは僅かばかりの悔しさと純粹な恐ろしさを感じずにはいられなかった。

「それでは、失礼しますね？」

そう言つて部屋から出ていくサヤをもう一度呼び止める気力さえ挫かれたのはとはやては二人きりになるとどちらからとなくため息をこぼした。

「なんだったるう…私、今まで夢見てたのかな…」

現実を否定しようとする小さな呟き。なのはらしくない言葉だということとは、はやても百も承知だったが、はやて自身も心のどこかで夢であれば、と願っていることもまた事実だった。

「あれが本物の巫女、なんやろうな…」

特定の宗教を信じているわけでもなく、困った時の神頼み程度にしか神という存在を信じていなかったはやてだったが、現実に存在しているのだということ突き付けられ、何も言うことができなかつた。

「けど、まあ、それはそれや。私らがせなあかんことは山ほどあるんや切り換えて行くで」

なのはに、というよりもはやてが自分自身に言い聞かせているような言葉だった。はやての言葉になのはも力強く頷いた。自信に満ちた、頼りになる笑顔。普段のなのはだった。

「そう…だよね。悩んでる暇なんてないんだよね。サヤさんとも約束したもんね」

第十話『剣と巫女（後編）』（後書き）

まだまだ半人前だけど

ううん、半人前だからこそ

いつも命懸けだった

だからこれは勘じゃなくてきつと予感

次回、魔法少女リリカルなのは *striker s* 闇の叡智と光の
右手

第十一話『黄昏と憂鬱』

これは大きな嵐の予感

第十一話『黄昏と憂鬱（前編）』（前書き）

こんにちは、月兔です。

やっぱり新人四人が出てくると難しい…

技量不足を痛感した十一話でした。

今回もちゃんと長くなりそうなので前後編に分けてみました。

皆さんからのご意見やご感想、アドバイス等お待ちしております。

では、第十一話をどうぞ

時々、考えることがある

どうして世界は平和にならないのか？

きっと誰もが望んでいる

もっと平和に、もっと幸せに

なのに、世界は少しも…

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 闇の叡智と光の右手

第十一話『黄昏と憂鬱（前編）』 始まります

第十一話『黄昏と憂鬱（前編）』

第十一話『黄昏と憂鬱（前編）』

機動六課屋外訓練場

「今日の午後からだよね、なのはさんが戻ってくるの」
海風にスバルの青い髪がなびく。綻んだ頬は喜んでいるように見える。

「あんだ、嬉しそうね」

その隣で苦笑交じりの笑みを浮かべているのはスバルの他称相棒、ティアナだ。

「昨日のスバルさん、なんだかもの足りなさそうな感じでしたね」
そう言ったのはキャロ。

「でも、ヴィータ副隊長が聞いたら怒り出しそうですね」
エリオの言葉にスバルの顔色が変わる。

「ち、違う、あたしはそんなこと思ってないよ。ヴィータ副隊長に不満なんて…」

「わかってるわよ、そんなの。あんだなんか特別にお世話になってん

だから」

慌てるスバルの肩をティアナが叩く。

「もう、ティアアったら」

スバルが頬を膨らませるがティアナは気にする素振りさえ見せない。それは普段の何気ない、いつもと同じ光景。

そのはずだった。

「えっ…」

体を突き刺す寒気。冬のそれとは全く異質の、生気を奪う気配にスバルの体が反応する。反射的にバリアジャケットとデバイスを起動させて、周囲を警戒する。

「ティア、これは…」

「あたしだってわかんないわよっ！！けど、これはヤバい…」

クロスミラージュを構えるティアナの首筋に汗が粒となって浮かんでいる。エリオはストラダーダを両手で握り締め、キャロを守るように辺りを警戒している。

「三人とも、気抜かないで」

ティアナが三人に指示を出す、その声はどこか震えている。四人

とも若いながらも修羅場の一つや二つはくぐり抜けてきた。機動六課の厳しい訓練を耐え抜いた自信もあった。しかし、その自信を容易く打ち碎いてしまうほどの圧倒的で、絶望的な力が其処にはあった。

「エリオくん……」

「……キヤロ、心配ないよ。大丈夫さ、きつと」

不安そうなキヤロをエリオが励ますが、その顔は緊張感で満ちている。空気が質量を持ったかのように上からのしかかり、四人を押し潰す。

「なんなのよ、一体……」

これまで感じたことのない圧倒的なプレッシャー。ただ立っているだけで汗が噴き出してくる。緊張は細い糸となり、周りを警戒するように張り巡らされていく。しかし、その糸は呆気なく切れてしまった。

「あっ……」

正体不明の威圧感が消えた瞬間、スバルの口から気の抜けた声が零れる。その隣ではティアナが崩れるように地面に座り込んでしまった。

「一体、今のは何だったんでしょっか？」

肩で息をしながらエリオが呟く。しかし、誰も何も答ええない。答えられない。

「わかんないわよ。けど…あたし達は何もできなかった」

ティアナは悔しそうに呟くと下を向いて肩を震わせた。積み重ねてきた時間と努力。その全てを否定するほどの力を前にして四人とも動くことさえできなかった。

「でも、敵意みたいな感じはしませんでしたね」

キャロの言葉にスバルが頷く。

「確かに…死ぬ、とは思ったけど、殺されるって感じはしなかったかも」

「どっちもおんなじじゃないっ!」

半ばヒステリー気味にティアナが叫ぶ。普段のティアナらしからぬ言葉にエリオが慌てて落ち着かせる。

「ティアナさん、落ち着いてください。これからどうするか考えましょう?」

エリオの言葉にティアナは一瞬顔をしかめて、小さく息を吐いた。そして、大きく息を吸い込むとゆっくりと吐き出した。

「そうね、切り換えが肝心ね」

「で、どうするの?ティア?」

「一旦、隊舎に戻りましょう。何か事件があったなら訓練なんて場合じゃないもの」

ティアナの言葉に三人は頷く。四人は来た道を回れ右して隊舎へと駆け足で戻り始めた。しかし、すぐに此方に向かってくるヴィータに出会い、足を止めた。

「おう、おめえら、どうした？そんなに慌てやがって」

「あの、今の…」

今のは何だったのか、尋ねようとしたスバルをヴィータが遮る。

「アレなら気にすんな。おめえらには関係ねえことだから」

あらかじめ準備していたかのような答え。ヴィータが何か知っているのは明らかだったが、それを四人に教えてくれるつもりはないらしい。

「でも…」

「心配すんな。事件だったらとっくに呼び出してる。それがねえってことはおめえらは訓練しろってことだ」

反論を許さないヴィータの言葉に四人は黙り込んでしまう。

「あの、ヴィータ副隊長…なのはさんは？今日の午後からはなのはさんも訓練に戻られるはずじゃ？」

スバルが恐る恐る尋ねるとヴィータの顔色が僅かに曇る。

「し、心配すんな。帰ってくるのがちょっと遅くなったから今日は休むように言っただけだ」

嘘は言っていないが、大切な部分は隠している。そんな感じの言葉だった。ヴィータの目が宙を泳いでいる。言葉を選んでいるというよりも、どうやって誤魔化そうか悩んでいる表情だった。

（何か隠してるわね… たぶん、なのはさん絡みで）

ティアナの念話に三人が頷く。いい意味でも悪い意味でもヴィータは真っ直ぐな性格で直情的だ。人に隠し事ができる性分ではない。

「ヴィータ副隊長… 本当に何もありませんか？」

スバルが静かに尋ねる。その妙な迫力によりヴィータはすぐに言葉が出なかった。新人如きに気圧されるヴィータではなかったが、隠し事をしてる後ろめたさからか、次の言葉が出てこない。

「ヴィータ副隊長、隠さないで話していただけませんか？」

ティアナがヴィータに迫る。何も無い、では押し通せない。しかし、新人達には何も言えない。板挟みで悩むヴィータの表情を見て新人達の不安が深まっていく。

「僕達に言えないくらい危ないことなんですか？」

新人達を危険から遠ざけようとして何も言わなかったことはこれま
でなかったわけではない。特にフェイトはその傾向が強い。そうな

ると今回の件も危険過ぎるといふ判断がないとも言切れない。ヴィータがここまで頑固になるといふことはその可能性は十分にある。

「そ、そんなんじゃないよ。いいから訓練に行くぞ」

ヴィータは無理やり押し切ろうとするが四人とも頷かない。

「これじゃ、訓練に集中できません。せめて何があったか教えてください。お願いします、ヴィータ副隊長」

キヤロにまで詰め寄られ、ヴィータはついに堪えきれなくなった。

「…ごめん、はやて…」

部隊長室には俯くヴィータと少し怒り気味の新人四人、対するはやてとなのはは少し疲れた表情を浮かべている。

「まあ、いつかはこうなるとは思ってたけど…」

「せやね」

結局、隠しきれなくなったヴィータは事情を話してしまい、話を聞いた四人は問答無用で隊長室に向かう運びになったのだ。

「どうしてフェイトさんが捕まったことを僕達に黙ってたんですかっ!?!」

「そうです、何も教えてくれないなんてひどいですっ!!!」

エリオとキャロがはやて達に迫る。怒りと悔しさ、悲しさ。二人の目尻には涙が浮かんでいる。二人にとってフェイトは母親のような姉のような存在である。肉親のいない二人にとってはフェイトは家族も同然だ。そのフェイトが攫われて、しかもそのことを秘密にされていたの黙っていられるはずがない。

「黙っているように指示したのは私や。二人が怒るのはもっともやけど、判断を間違ったとは思ってへんし、正直言って今も話すべきやないと思っっている」

いつにもまして強い光の宿ったはやての眼差しに二人の勢いも削がれる。

「現状で私らは何もわかってへん。これは本当のことや。教えてあげられるなら私かて教えてあげたい。けど、教えてあげられへん。ごめんな」

ごめんな、と呟いたはやてにエリオとキャロは何も言えなかった。はやては泣いていた。涙は見せず、心の中で泣いていた。何も出来ない自分自身を責めるように、悔いるように泣いていた。

「エリオ、キャロ、それにスバル、ティアナ、黙っていてごめんなねでも、本当に何もわかっていないんだ。話せることは本当に少しだけ…それでもいい？」

ゆっくりと話しかけるなのはに四人はそれぞれ顔を見合わせ、黙って頷いた。

なのはの話は本当に短いものだった。フェイトが捕まった経緯。神

剣とサヤのこと。本当にそれだけだった。

「…サヤさんは今どこに？」

「医務室や。ちょうど皆とすれ違いになったな。あ、会いにいったらあかんよ。シャマル先生の許可が出るまで面会謝絶やからね」

エリオの言葉を先読みしてはやての告げる。エリオは幾分落ちこんだようだったがそれ以上は何も言わなかった。

「さっきのあの力はその人の力…ということではないんですか？」

「そう考えていいよ。厳密にはサヤさんの持っているロストロギアの力なんだけど、現状で制御できるのは彼女だけだから」

なのはの言葉にティアナは俯く。ティアナの想像を遥かに越えた圧倒的な力。それが一人の人間の生み出したものだという真実に恐怖を隠しきれない。

「ちなみに、魔力値は最低でもSS+。さっきの力に関しては計測不能。サヤさんが寝込んでいるのもその反動のせいや」

はやての言葉に四人の表情が強張る。

「四人ともそんなに落ち込まなくてもいいよ。動けなくても仕方ないよ」

なのはが慰めるが四人の表情は晴れない。悔しい顔。悲しい顔。怯える顔。驚く顔。四人それぞれが別々の表情を浮かべ、なのはを見つめている。なのはは一瞬はやての方を見て、小さく頷いた。

「…じゃあ、少し遅くなったけど今から午後の訓練、始めようか」

「……えっ!?!」「」「」

意外な言葉に四人が驚きの表情を浮かべる。ヴィータでさえ、信じられないものを見るようになのはを見つめている。

「なのは、こんなときにどうして!?!」

「こんなとき、だからだよ、ヴィータ副隊長」

有無を言わせないなのはの笑顔。ヴィータはそれ以上、何も言わなかった。

「今の私らに出来るのは待つことだけや。シグナムやユーノ君が調べに動いてくれるけど、情報が入ってくるまでただ待つのも辛いやる?こっちは私に任せて、皆訓練に行ったらええよ」

はやての後押しもあり、FW四人はお互いに顔を見合わせて頷き合う。

「……お願いしますっ!!」「」「」

「私とヴィータ副隊長対スバル達四人の全力全開の真剣勝負…他のこと考えてたら怪我じゃすまないよ」

なのはの不敵な笑顔。言葉の通り、なのはは全力で向かってくるの

だと感じとつた四人の表情が真剣味を帯びる。他のことを考えている余裕はなかった。

「それじゃ、四人は先に行っておいて。私もはやて隊長との話が終わったらすぐに行くから」

「……はいつ……!」「……」

元気いっぱいの返事をして四人は部屋を出ていく。足音が遠のいたのを確かめるとはやては大きくため息をこぼした。

「なのはちゃん、今から訓練って一体どういうつもりなん?」

若干の苛立ちが混じつたはやての言葉。現状、なのはが訓練に行ける余裕がないことはなのは自身が一番理解している。そう思っていた。そのなのはが自分から訓練を行うと言い出すのは信じられなかった。もちろん、なのはにも何か考えがあつてのことだろうが、それでも何も思う所がないとは言えなかった。

「ごめんね、はやてちゃん。本当はこんな時に訓練なんてしてる場合じゃないんだけど……でも、今のあの子達には必要だと思うから。うっん、違う……本当は私自身が気を紛らわしたいだけなんだ、きつと」

なのははそう言つとそれまで固く握りしめていた拳をゆっくりと開いた。汗で湿つた手のひらは小刻みに震えている。

「なのは、お前……」

「情けないなあ、サヤさんやあの子達にあんなこと言ったのに、ま

だ震えが止まらないや…」

なのはの口から乾いた笑いが零れる。

「なのはちゃん…怖いん？」

なのはは何も言わずに小さな笑みを浮かべた。あれほど絶対的な力を目の前にして恐怖を抱かない人間などいない。命を摘み取る、死と滅びの力。それを目の前で見せつけられて平気なはずがない。

「だけど、あの子達の前じゃ、平気な顔しないと…あの子達もつと不安になっちゃうから」

どんなことがあってもなのはは不安そうな素振りを見せてはいけない。集団において一人の不安や恐怖はすぐに内部に伝染してしまう。なのはのように影響力の強い人間であれば伝染のスピードは爆発的に加速する。逆に、なのはが何事もないかのように振る舞えば伝染を止め、不安や恐怖を打ち消すこともできる。

「なのは…無理すんなよ」

「ありがとう、ヴィータちゃん。でも、大丈夫だよ」

無理な笑顔が痛々しい。強い魔力を持っていても、優れた戦闘技術と経験を持っていても、不屈の心を宿していようともし中はまだ二十歳にも満たない少女なのだ。怖いものは怖い。

「まあ、このままやと後々の業務に差し支えそうやからな…それで

気が晴れるなら、仕方ないなあ。けど、無理な禁物やで」

なのはを心配するはやての言葉。その優しさだけあれば十分だった。

「あの子達をあんまり待たせられないからもう行くね」

そう言ってなのはは部屋を出ていく。続いて出て行こうとしたヴィータをはやてが念話で呼び止める。

(ヴィータ、なのはちゃんのこと、よろしく頼むな)

ヴィータははやてと視線を合わせ、力強く頷く。

(はやてに言われるまでもねえ。なのはは絶対、あたしが守るっ！)

ちなみに、訓練の方は宣言通り全力全開のなのはが特大の砲撃魔法を連発し、四人を完膚無きまでに叩きのめした。その凄まじさは味方であるはずのヴィータさえ、恐怖を抱くもので訓練を終えたなのはの表情はこれ以上ないくらいにすっきりとしたものだった、とかなかったとか。

『黄昏と憂鬱（前編）』

F i n
·

第十一話 『黄昏と憂鬱（前編）』（後書き）

『黄昏と憂鬱（後編）』に続く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7571/>

魔法少女リリカルなのはStS ~闇の叡智と光の右手~

2010年10月18日00時58分発行